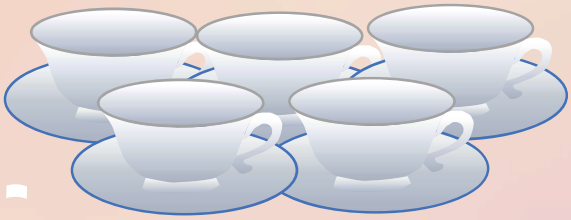
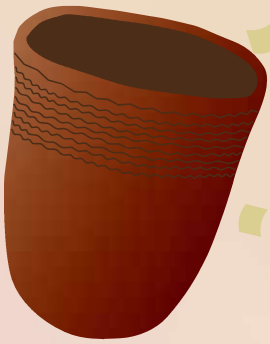
神奈川県
教育委員会





令和８年度考古学ゼミナール

考古学でひも解く

文化の画期





2026

10.17(土)　10.24(土)　10.31(土)

かながわ県民センター2階ホール

神奈川県埋蔵文化財センター

講 師 紹 介

○ 山本 孝文 （やまもと たかふみ） 日本大学文理学部教授

（専門/研究テーマ）

東アジア考古学／古代の日中韓交渉、古代東アジア諸国の国家形成

（著書・論文等）

『文房具の考古学 東アジアの文字文化史』（吉川弘文館・2024 年）／『考古学概論―初学者のための基礎理論』（共著・ミネルヴァ書房・2022 年）／『古代朝鮮の国家体制と考古学』（吉川弘文館・2017 年）ほか多数

○ 小林 謙一 （こばやし けんいち） 中央大学文学部教授

（専門/研究テーマ）

日本考古学／縄文年代論、縄文文化の起源、縄文集落

（著書・論文等）

『考古資料と歴史資料』（編著・中央大学出版部・2024 年）／『土器のはじまり：市民の考古学16』（編著・同成社・2019 年）／『縄紋時代の実年代講座』（同成社・2019 年）／『発掘で探る縄文の暮らし』（中央大学出版部・2011 年）／『縄文文化のはじまり－上黒岩岩陰遺跡』（新泉社・2010 年）ほか多数

○ 鈴木 伸哉 （すずき しんや） 昭和女子大学人間文化学部准教授

（専門/研究テーマ）

植物考古学／木製品の用材分析・年輪年代にみる木材利用

（著書・論文等）

「近世江戸の植物利用」『季刊考古学145』（雄山閣・2018 年）／『木材の中世―利用と調達―考古学と中世史研究12』（共著・高志書院・2015 年）／『木の考古学 出土木製品用材データーベース』（共著・海青社・2012 年）ほか多数

○ 小倉 淳一 （おぐら じゅんいち） 法政大学文学部教授

（専門/研究テーマ）

日本考古学／弥生土器、弥生時代集落

（著書・論文等）

『仮家塚遺跡！南房総最古の農村を探して』（共著・文学通信・2025年）／「権田原遺跡の環濠―大塚遺跡との比較を通じて」『法政考古学47』（法政考古学会・2021年）／『図説 都筑の歴史』（共編著・都筑区ふるさとづくり委員会・2019年）ほか多数

○ 櫻井 準也 （さくらい じゅんや） 尚美学園大学名誉教授

（専門/研究テーマ）

日本考古学／近現代考古学、物質文化研究、現代社会と考古学

（著書・論文等）

『歴史と民俗41 特集：民具研究と考古学』（共著・平凡社・2024 年）／『日本史の現在1 考古』（共著・山川出版社・2024 年）／『遺跡と現代社会』（六一書房・2023 年）／『増補 ガラス瓶の考古学』（六一書房・2019 年）ほか多数

令和8年度　考古学ゼミナール

考古学でひも解く 文化の画期

⋆日　程（各講の後に質疑･休憩）⋆

【10 月 17 日（土）】

開講式　14:00 ～ 14:10

第 1 講　14:10 ～ 15:40

【10 月 24 日（土）】

第 2 講　13:00 ～ 14:30

第 3 講　15:00 ～ 16:30

【10 月 31 日（土）】

第 4 講　13:00 ～ 14:20

第 5 講　14:45 ～ 16:05

修了式　16:30 ～ 16:45

⋆会　場⋆　　かながわ県民センター　2階ホール　　（横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2）

要旨集　目次

◇第 1 講◇　「文字文化の始まりと文房具」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
日本大学文理学部　教授　　山本 孝文

◇第 2 講◇　「縄文土器のはじまり―旧石器から縄文文化へ―」　・・・・・・・・・11
中央大学文学部　　教授　　小林 謙一

◇第 3 講◇　「「木の考古学」が明らかにする鎌倉・江戸の街並みと暮らし」・・・33
昭和女子大学人間文化学部　准教授　　鈴木 伸哉

◇第 4 講◇　「かながわでコメ作りが始まった頃」　・・・・・・・・・・・・・・・・39
法政大学文学部　　教授　　小倉 淳一

◇第 5 講◇　「遺物から見た消費生活と近代化－近代消費生活の実態と画期－」・・51
尚美学園大学　名誉教授　　櫻井 準也

文字文化の始まりと文房具

日本大学文理学部　教授　山本 孝文

導入　―文字が担った役割と文房具

現在世界の多くの人々が使用している文字は、音声言語（話し言葉）を表記した記号であるものが多い。現代社会に至るまで、多くの人々に文字が普及するほどに、文字は伝達媒体として利用されてきた。特に識字率がほぼ 100％とされる日本では、文字による伝達が社会・生活・文化の質的向上に貢献している。しかし、文字の役割が単なる意思疎通や記録の媒体であっただけならば、多様な字形・書体、文章構成が生まれることも、身分階層や職掌、性別で限定的に使用される文字が生まれることはなかった。むしろ文字には単純伝達以上の意味が込められていることが多く、それは時代をさかのぼるほど顕著である。

古くは神の意志を目に見える形で人間に伝え、記録するために文字は使われ、また偉大な指導者・支配者の事績を顕彰し、その存在を後世に残し伝えるために使用された。そして、政治機構の意志・指示・情報を正確に伝達し、さらに支配地域内の構成員の状況やその変化を正確に把握するためにも文字は使われた。このように文字の役割は多岐にわたるが、それはいつ、どのような社会段階のときに文字が導入されたか、どのような必要に迫られて文字が発明されたかということにも左右される。特定の時と場所で使われた文字は、その時代や社会を映し出す鑑であるといえる。

ただし、文字が書かれた資料（史料）は、古い時代のものほど現代まで残っている数は少ない。古代において文字がいつ、どこで、どのような頻度で使われていたかは、文字資料自体からはわからないことが多い。一方で、考古学的な観点からその状況にアプローチできる資料が文房具（筆記具）である。特に東アジアで発達した書法である墨書は、文字を書くために多様な種類の道具をセットで使用しており、遺跡から出土するそれら文房具は、文字使用の状況を一定程度反映している。本講座では、日本を中心とした古代東アジアにおける文字使用のはじまりと普及について、出土文房具をふまえた考古学的観点から概観する。

１．日本の文字使用の始まりをさかのぼる

古代日本の国家形成に関わる議論に「七五三論争」というものがある。これは日本における古代国家成立の時期をそれぞれ７世紀、５世紀、３世紀とみる説を、人間の成長過程の行事になぞらえたものである。７世紀はいわゆる「公地公民」や中央集権体制が完成した律令国家の成立期として、

５世紀は「倭の五王」に代表される倭国王の権威が国内・国外的に最高潮に達し中央官制の萌芽が見られる時期として、３世紀は邪馬台国、卑弥呼や巨大前方後円墳の成立など日本の広域が緩やかにまとまりはじめる時期として、それぞれ大きな画期となる時期と評されている（都出 2011)。そしてこの画期は、文字使用についてもあてはまりそうである。

まず、古代日本における文字システムの完成が７・８世紀の律令的統治方式の浸透期であることは異論の余地がない。広い地域に政治・経済的政策を行きわたらせ、税収を正確にするために、文字による通知と記録､つまり文書行政が行われた。７世紀代には庚午年籍(670 年)や庚寅年籍(690 年)などの戸籍も作られたとされ、成文法である律令の編纂も始まった。そこに体系的宗教である仏教の普及が加わり、その教義が文字によってコピー（写経）され伝達された。それを発信する側も受け取る側も文字を解し使用できる必要があるため､文字を駆使する階層は支配者層､官人層をはじめ､地域の有力者まで一気に広まったと思われる。この時期の遺跡から多く出土する木簡や硯などがその状況を確実に反映している（図１左)。

それ以前に文字使用が大きく進展したのは古墳時代中期の５世紀代である。この時期の文字使用に関しては、中国の歴史書に記された内容と、遺跡から出土した文字資料という二つの面から考えることができる。この時期には、上記のように倭の五王が中国南朝の宋へ遣使し、上表（文書を差し出すこと）したことが記録されている。さらに、この時期の埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳から出土した鉄剣・鉄刀には漢字による銘文が刻まれており（図１中)、倭国内で文字を使って文章が作成されていたことが明確にわかる。一方で、江田船山古墳の鉄刀には刀の製作者の名（伊太和）と文字を書いた人物の名（張安）が記されているが、文字を書いた人物はその名から渡来系の人物であると考えられ、筆記がまだ倭人のものになっていなかった可能性もある。いずれにせよ、この段階には文字は漢字や語句を組み合わせた文章として使用されるようになっており、首長層の間で文字の理解や文章作成が進んだと考えられる。しかしさらに下位階層まで文字が浸透していた痕跡は見られない。

さらに古い時代ではどうであろう。日本における文字使用の痕跡は、弥生時代後半までさかのぼることができる。やはり歴史書と考古資料の両面から見てみよう。『後漢書』や『三国志』には、奴国や邪馬台国などの倭の国々が中国と交流し、詔書や文書を受け取ったり、中国へ上表したりしたことが記されている。これらの記録は、倭人自身が文字を使用していたことを直接証明するものではないが、文字を理解したり代筆によって中国へ送る文書を作成したりする人々がいた可能性を示している。また、中国から伝来した鏡や銭貨など、文字が刻まれた資料も遺跡から出土しており、弥生時代後半には一部の地域で文字が「存在」していたことがわかる。しかし、これらを当時の倭の人々がどれだけ理解していたかは疑わしい。弥生時代から古墳時代にかけての遺跡から、まれに「井」や「田」などの漢字のように見える墨書と思われるものが書かれた（描かれた）土器が出土することがある（図１右)。墨書的な痕跡があると文字のように見えてしまうが、墨書が必ずしも文字だけを記していたわけではない。文字であったとしてもその意味を理解して適切に使っていたのか、

慎重な検討が必要であろう。文字使用の初期の段階で器物に書かれた一字の文字はそれ自体何を表すのか明確でない場合が多く、記号的用法とせざるを得ない。自由に文字を操った活動とは評価できないであろう。

以上のことから、弥生時代後半（３世紀頃）を文字の「初出期」、古墳時代中期（５世紀頃）を文字の「運用期」、飛鳥時代以降（７世紀頃）を文字の「普及期」とすることができる。出土遺物に文字が書かれていることと、それが出土した地域で文字が使用されていたかどうかは、分けて考えなえればならない。ある地域で文字が書かれていた可能性を論じるために有効な資料として、文字を書くための道具である「筆記具」「文房具」が出土するか否かがポイントになる。しかしそれも厄介な問題を孕んでいることを後述したい。

２．漢字の誕生と普及

文字の発明と使用が人間社会の歴史において画期的な出来事であったことは古くから説かれてきた。アメリカの文化人類学者ルイス･ヘンリー･モーガン（モルガン）は、その著書『古代社会（Ancient Society）』の中で、火の使用、弓矢の発明、土器製作技術の発明、鉄器の使用など様々な要素を根拠に、人類社会の発展段階を「野蛮」「未開」「文明」の各時代に区分した。その中で現代社会につながる「文明」時代の始まりを、音声字母の発明と文字を使用した記録の開始からとしている。

ただしエンゲルスやエルマン・サーヴィスなどによる、現在の歴史学・社会学に影響を与えている議論では、文字の発明を人類社会の進歩の重要な指標とする見方はさほど重視されていない。文字や文字活動の開始およびその内容を明らかにするのは容易でなく、さらに体系的な文字システムを持たなかったにもかかわらず高度な社会システムや文化を有していた集団も多くあったためである。文字の存在そのものよりも、それを用いてどのような社会活動を行っていたのかという側面が、人間の社会水準を考える上でより重視される。

中国には文字の誕生説話がある。後漢の王充が著した『論衡』骨相篇や許慎の『説文解字』、『荀子』などには、伝説の五人の帝王（五帝）の初代である黄帝に仕えた蒼頡（そうけつ）が鳥や獣の足跡から文字を発明したとある。その論理は、足跡から鳥獣の種類がわかるように、その場に実体がなくとも文字によってそれが表すものを表現できることに気付いたというが、これは文字の発明をドラマティックに描いた説話に過ぎない。

漢字の起源が中国殷代の甲骨文字だとして、それ以前に文字があったのかは様々に議論されている。甲骨文字以前にも、中国の新石器時代から記号のような文様があることが指摘されている。大汶口文化期（紀元前 4000 ～ 2500 年頃）や龍山文化期（紀元前 3000 ～ 2000 年頃）など新石器時代から殷代にかけて土器には、刻画符号や陶文と呼ばれるものが見られる。さらに古い仰韶文化の彩陶にも抽象的な記号のようなものがある。これらの中には人や物、太陽や山などを表したように見えるものもあり、漢字の起源と考えられることがある（図２）。ただしこれらを文字と判定するためには、個々の記号に意味があることはもちろん、それらが繰り返し使用され、配列の違いによって

異なる意味を示し得ることが重要な条件であるが、まだその条件は満たされていない。

現状で確実な文字といえる殷代の甲骨文字や周代の青銅器の金石文は、当時の社会の宗教的性格を受けて誕生・発展した（図３）。甲骨文字は王が執り行った卜占の日付、神への問いかけの言葉、それを読み上げる役割の人（貞人）の名前、問いかけに対する卜占の結果を王が解釈した内容などが書かれている。これは国の政策決定に関わる内容であるとともに、神託を文字で記録したものであり、それを刻み付けた行為やその場面状況にも宗教的意味があった。銘文が鋳出された青銅器は祭祀の際に使用された儀器であり、文字が鋳出された器物を使用して祭祀を行うことにより高い宗教性が得られたのであろう。このような祭政一致の時代の支配者の必要により、東アジアの文字である漢字は形作られていったのである。その後、秦代になると各地で異なっていた文字が統一され、皇帝の文字（小篆）と統治のための文字（隷書）が分離し、民衆統治のための文字が普及した。

３．文字を書いていた古代の人々

それら文字を書いた様々な身分や役割の人の姿を見てみよう。古代エジプトやメソポタミアには書記とその養成制度があり、東アジアでも書記官や記録係が存在した（図４左）。ルーブル美術館蔵のエジプト第四王朝時代に作られた書記の像では、左手でパピルスの巻物を広げており、左手にはすでになくなってしまっているが葦のペンを持っていたと思われる。第五王朝のものとされるサッカラのマスタバ礼拝堂の壁画のレリーフには耳にペンをいくつも挟んで字を書く人の姿や、第一八王朝の最後のファラオだったホルエムヘブの墓のレリーフでは筆記者が何人も並んで腰を低くして記録にいそしんでいる。ファラオの言葉を書き留めているのであろう。

古代東アジアでも、筆記者の姿が描かれたものがある。後漢代の壁画に河北省望都一号漢墓の人物図がある。円形の石硯を前に置き、榻（とう）と呼ばれる台の上に座った人物が簡牘（木簡・竹簡など）に筆で何かを書いている。これとほぼ同じ構成の筆記者の姿は高句麗の壁画古墳である集安の舞踊塚の主室右壁天井画にも見られる。山東省の沂南後漢墓の画像石では、冠を被り正装した書記が耳に筆をかけ、削刀を腰に下げている（図４中）。エジプトでも中国でも、筆を耳にかける共通の所作があるのが特徴であるが、漢代以前の中国では筆管の端を意図的に尖らせていることが多い。これを「簪筆（しんひつ）」、すなわちかんざしの筆と呼んでおり、いつでも字が書けるように筆を頭に挿していたことを表す。また「珥筆（じひつ）」という言葉もあり、やはり冠の脇に筆を指すことであることが後漢代の文献に見られる。

「刀筆之吏」という言葉は、古代の官人階層を表す語である。筆で文書を作成し、刀子で木簡を作ったり文字を消したりした文房具使用の代表階層が官人階層であったことを示している。政治活動・経済活動・宗教活動など多様な活動を含め官人階層が国家の施策に幅広く動いていた時代状況を反映する言葉といえよう。古代東アジアの官人を表現した石像や壁画、俑（人形）などを見ると、巡方・丸鞆などの腰帯具（銙）が付属した帯を着用しているものが多く見られる（図５中）。これには刀子やそれを研ぐための砥石など各種佩用物をぶら下げている。そのうち算袋（魚袋）・照袋・臂袋・韘

嚢などと呼ばれるポシェット状の袋に、筆・墨・硯・紙などの文房具類を入れていたとされる。その実物と考えられるものが奈良県三ッ塚古墳群の終末期古墳から出土している（図５右）。

中国西安郊外にある唐の三代皇帝・高宗と則天武后の夫婦合葬陵である乾陵には、周辺異民族が唐の皇帝の徳を慕って朝貢してきた場面を表した「六十一蕃臣像」があり、この人々の腰にはポシェットが下がっている（図５左）。中国皇帝の前では異民族の長は等しく官人階層であり、文房具で文字を記録すべき立場だったということであろうか。

初期の官人層はどのように文字を習得したのか。筆記のスキルは生まれつき備わっているものではなく、練習や経験によって身につく後天的な能力である。文字の使用が一般的でなかった古代社会では、文字を教える側にも学ぶ側にも甚大な努力が必要であり、文書によって政治や経済を運営する社会では多くの筆記者を養成する必要があった。古代の出土文字資料には、習書木簡と呼ばれる文字を習得するための練習の跡が残されている。中国の漢代の遺跡からは、『急就篇』や『蒼頡篇』などの字書を繰り返し書いた竹簡が出土している。また、韓半島や日本でも『論語』『春秋』『尚書』『千字文』などを書いた木簡が見つかっており、定型的な文字や文章を書くための練習に使われたと考えられる。同じ漢字を何度も書いた習書木簡には、まだ不慣れな字から上達した字、さらには落書きのようなものまであり、筆記に携わった人々の努力や苦労がうかがえる（図６）。

４．文房具は文字を書くための道具？

文字を書くためには道具が必要である。特に東アジアにおける筆記法の代表格である墨書は、筆・墨・硯・紙・木簡など多種多様な道具を要する。これらはまれに遺跡から出土するため、それによってその当時文字が使用されていたと解釈することがある。しかしそれらの存在と文字の使用は直結させて考えられるものではない。人類は文字が生まれる以前から、絵や文様、記号などを「描く」「記す」行為を行っており、そのための道具もあった可能性が高い。古くは中国の新石器時代にあたる仰韶文化の彩文土器に描かれた幾何学文様や動物文様にも、線の濃淡や払い、水滴形の点描など、筆のような道具の使用を思わせる痕跡が見られる（図７）。しかし、たとえ筆のような道具で文様を描いていたとしても、それは「筆記具」ではなく「施文具」であり、それは後世の文字用の筆とは区別するべきものである。

このように、遺跡から「文房具的な道具」が出土したとき、それが本当に文字を書く道具として使用したかの判断は難しい。遺跡から「筆のような」道具が出土したとき、それで字を書いていたのか絵や文様を描いていたのか、漆を塗っていたのか、化粧をしていたのかなどの判断を間違えると、歴史解釈に大きな齟齬が出てしまう。「硯のような道具」が発見されたとき、それで墨を磨っていたのか、砥石として何かを研いでいたのか、その判断如何によってそれが出た遺跡やその時代の社会・文化の評価、時代のイメージが変わってしまうのである。

現在、弥生・古墳時代研究において議論されているものに、この時代における「硯」の有無がある。日本列島の九州の遺跡を中心とした出土品に、研磨痕がある板状の石がある。これらを「板石硯」

と呼び、文字使用の証拠とする見方がある。前述のように、弥生時代後半期には中国の魏からの詔書に対して邪馬台国から上表が送られたことなどが記されており、この時期が日本における文字の初出期であることは疑いない。そして類似したものが楽浪などで出土している（図８）。しかし当時の倭人が文字を書いていたことには否定的な見方もあり、魏から文筆担当者が派遣されていた可能性を想定し、文字普及を過大評価すべきではないとする。いずれにせよこの時期、日本列島内で誰かが字を書いていたことは考えられるが、その際に板石硯を使っていたか。板石硯に関しては、硯ではなく単なる砥石であるとする説もあり、議論は続いている。

文字使用の有無については、道具が遺跡から出土するか否かだけで議論しているわけではない。諸外国との外交における文字使用の必要性や内政における文書行政の蓋然性など、それぞれの時代が文字を必要としていたかどうかは、「文房具的な道具」が本当に文房具かどうかを考える上で重要な指標である。例えば、硯と同じような特性を持つ道具に縄文時代の製粉機にあたる石皿と磨石があるが、石皿を硯とみる人はいない。縄文時代の文字使用は、現状ではあり得ないためである。日本列島の一部の集団が国際舞台に登場した時代である弥生時代後半期に文字使用の必要性が高まっていたのは事実であり、筆記専用の道具がこの時期からあった可能性は残されている。ただし、それが普遍化していたとは考えられない。

５．考古資料としての文房四宝

上記のように、文字を書くという作業に必要な道具は一種類ではなく、いくつかの道具を組み合わせて使用する。東アジアでは、古代から現代に至るまで大いに隆盛した「墨書」という筆記行為に必須の四つの道具、筆・墨・硯・紙（書写材料）のことを特に「文房四宝」ないし「文房四友」と呼んだ。これらはどれか一つでも欠けると墨書は実現しないため、遺跡からどれか一つが出土すれば墨書行為があったことを表す間接的な証拠になるが、やはりセットで確認されたとき、その蓋然性はより高まる。

中国湖北省の江陵鳳凰山 168 号漢墓（紀元前 1 世紀頃）では、磨石を持つ円形の板硯、筆とそれを入れる筆筒、粒状の墨、何も書かれていない木の札（おそらく簡牘）、文字を削って消すための削刀、秤、銅製の砝碼（重さをはかるためのリング状の分銅）、竹の算木（計算用具）、半両銭など、各種文房具や銭などが発見された（図９）。この遺物の組み合わせは、この時期の文房具がどのような活動に使用されたのかを考えるにあたって非常に示唆に富む。文房四宝がそろって出ており筆記のための条件が整っていることはもちろんであるが、加えて秤や分銅、算木や銭貨が出土していることは、この時期の筆記が経済活動とも密接に結び付いていたことを物語る。古代日本の遺跡で文房四宝の４点セットが出土した例はないが、飛鳥時代の古墳（終末期古墳）である奈良県竜田御坊山３号墳からは三彩の陶硯とガラス製の筆管が出土している（図 10）。日本では墓に文房具を副葬する習慣がないため、中国の唐の習俗に倣ったものと考えられるが、それは文字を自在に操って民衆統治に関わった高位の官人的性格の有力者を象徴すると考えられる。

遺跡から出土する文房四宝の特質は、多くが有機物であるがために残りにくいという点である。特に筆は木や竹で筆管を作り、筆毛に獣毛を使用するため、遺跡から出土する確率は非常に低い。ただし日本でも東アジアの他の国でも、竹簡や木簡が大量に出土するにもかかわらず、それに伴って筆がほとんど見つからないのは不自然である。その理由の一つとして、現代まで続く「筆供養」の概念が古くからあったこと、そして初期の筆が国からの配給品であり、使用後に回収されていた可能性が高いことが挙げられよう。この点は墨も同じで、遺跡からの出土は稀である。ただし中国では多少の情報があり、粒状の墨から固形墨へと移り変わることがわかっている。この墨の変化は硯の変遷にも大きく関わっている。

硯は遺跡から最も多く見つかる文房具で、その発展過程はよく知られており（図 11）、文字使用自体の変化とも連動する重要な資料である。最初期の硯は石製の平たい板硯であり、墨を磨り潰すための研石とセットになる（漢代）。これは墨が粒状だったことの反証といえる。固形の墨が発明され、手で持って磨れるようになると研石はなくなり（三国時代）、さらに墨が大型化し墨汁を大量に磨れるようになると（言い換えると、膨大な文字を書く必要が生じると）、陶製の硯が一般的になり、磨った墨汁がこぼれないように硯に縁が付き、墨汁を溜めるため「陸」と「海」ができる（南北朝代）。硯がさらに装飾的になり大型化するのは、文字と書写が象徴性を帯び、文字自体が政治・経済・宗教的性格だけでなく芸術的性格をも備えたことの証拠であろう（唐代）。

文字が書かれる媒体（書写材料）も時代に応じて変化する。墨書がない時代、文字は動物骨や亀甲、石材などに彫り込まれたり、金属に鋳出される方法で書かれていた（甲骨文字・金石文）。この時代、文房具と呼べるものは明確ではない。その後は、特別な文章は布などに書かれたが（帛書）、文書行政が始まり大量の文字が書かれる必要が出てくると木簡・竹簡など簡牘が普遍化する。多くの文字を書くことができる軽量な紙（おそらく書写用の紙）は紀元 1 世紀に中国の蔡倫が発明したとされ、この蔡侯紙によって現在に至るまでの代表的書写材料としての紙の地位が固まっていく。

このように、文字とそれを生み出す各種文房具は、相互に深く関わり合いながら発展し、社会に対して時代ごとに異なる役割を担い続けてきた。文字の誕生と展開、その役割の変化を考える上で文房具への視点が有効である理由はこの点にあるといえる。

おわりに　―文字の出現は社会に何をもたらしたか

遺跡から出土する文房具は文字の普及の度合いを測るものさしになり得る。特に腐朽しない陶製・石製の硯は遺跡から出土することが多く、それが出土した場所で文字を書いていたことのメルクマールになる。古代の文房具は、都城や官衙、寺院などで出土することが多く、文字が必要であった場所や階層、時代を反映している。一般集落ではあまり出土しない点からすると、当時の中央権力と文書行政の道具としての文房具は密接に関係していたとみられ、実際に平安時代の『令義解』『延喜式』などの記録にも文房具の配給と回収の記事が見られる。文房具の存在によって示される古代の文字使用は、当時の支配階層や官僚機構など限定された階層の占有物だった。

中国では統一秦の誕生とともに文字が統一され、文字で書かれた成文法（法律）が正確に伝わり、国内の情報は均質化されて共有された。韓半島では三国分裂の時代から各国が文書行政を取り入れはじめ、新羅による統一後にはその基盤を引き継いで地理的に偏った王都の意思を隅々まで届けるネットワークを設けた。日本でも律令国家の時代に九州から東北地方まで同じ行政システムの施行が可能になった。広域にわたる地理範囲と重層化した構成員を持つ「国家」というシステムの実現・維持のために、文字とそれを生産する文房具の完備が必要だったといえる。

このように、多くの人・集団・地域社会に向けて意思を等しく正確に伝達することを可能にしたことが、文字の発明の最大の貢献であり、そのための道具である文房具の社会的意義であるといえる。それにより人類はかつてない巨大な社会を作り上げ、外の世界とも結び付くことができ、現在の国際ネットワーク社会に至る第一歩を踏み出した。それが正しい方向であったか否かは、文字使用社会の到達点である現代を生きるわれわれも責任を負わされている。

参考文献

鐘江宏之 2020「文字の定着と古代の社会」『文字とことば　文字文化の始まり』岩波書店
北野博司 2005「伝達・記録方法 文房具」『文字と古代日本２ 文字による交流』吉川弘文館
国立歴史民俗博物館 2014『文字がつなぐ　古代の日本列島と朝鮮半島』
都出比呂志 2011『古代国家はいつ成立したか』岩波書店
平川南　 2005「伝達・記録方法　木と紙」『文字と古代日本２ 文字による交流』吉川弘文館
平川南編 2005『古代日本 文字の来た道』大修館書店
深津行徳 2006「文字の展開　古代東アジアの書体・書風」『文字と古代日本５ 文字表現の獲得』吉川弘文館
瀧交二　 2001「日本古代の「筆記具」と権力」『歴史評論』609　校倉書房
山田邦和 2006「表現の諸相　記号の役割」『文字と古代日本５ 文字表現の獲得』吉川弘文館
山本孝文 2017『古代朝鮮の国家体制と考古学』吉川弘文館
山本孝文 2024『文房具の考古学 東アジアの文字文化史』吉川弘文館
吉田惠二 2018『文房具が語る古代東アジア』同成社

山本孝文「弘法でなくとも筆を選ばず―文字と文房具は使いよう―」『本郷』2024 年９月号
https://note.com/yoshikawa_k/n/n2464f8e4d9cf



図１　日本の文字使用の諸段階
左：平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡と硯　中：埼玉稲荷山古墳と江田船山古墳の象嵌銘　右：片部・貝蔵遺跡の墨書？土器

遺跡	陶文	記号数	年代	文化
陝西半坡		113	BC4800-4200	仰韶
陝西姜寨		129	BC4000 以前	仰韶
陝西銅川李家溝		23	BC4000 以前	仰韶
山東陵陽河		4	BC4300-1900	大汶口
山東城子崖		88	BC2500-2000	龍山
青海樂都柳湾		57	BC2400-2000	馬廠
河南二里頭		24	BC2000-1400	龍山後

図２　中国殷代以前の陶文



図３　中国殷周代の甲骨文・金石文



図４　筆記者の姿　左：マスタバ礼拝堂　中：沂南後漢墓　右：高句麗四神塚



図５　古代の官人・外国使臣の姿　　左３点：乾陵六十一蕃臣像　中：節愍太子墓三彩俑　右：三ッ塚古墳群出土品



図６　習書木管
左：玉門花海　中：馬圏湾　右２点：秋田城跡



図７　彩陶の筆状道具を使用した文様
（馬家窯文化、東京国立博物館）



図８　伝平壌出土板硯



図９　湖北省の江陵鳳凰山 168 号漢墓出土品



図 10　奈良県竜田御坊山３号墳出土品

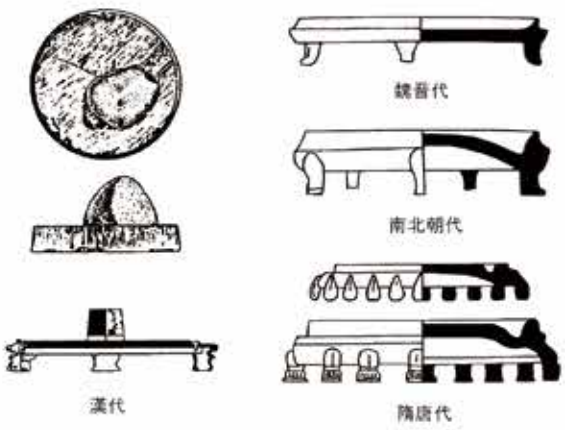


図 11　中国の硯の変遷

縄文土器のはじまり

―旧石器から縄文文化へ―

中央大学文学部　教授　小林 謙一

はじめに

土器の出現は、火の利用、言語の使用、加工した木・石など道具の利用、渡航技術の獲得、顔料や装身具を含む装身に続く人類史上の画期をなす文化史上のイベントであったと考えられるし、その前後に生じたと考えられる弓矢の使用、居住施設の確立、特定の共有化した儀礼行為の確立などとともに、旧石器時代と新石器時代の差異を示す要素としてきわめて重要である。土器の出現（発明または採用）がなぜ重要かと言えば、G．チャイルドが述べたように、化学変化を伴うという意味での人類が手にした初めての工業製品であるといえるからである。それまで手にしていた石器や木器、骨角器といった道具は、自然の素材を打ち欠いたり切り刻んだりして加工したもので、自然界からの獲得した原材をそのまま用いることの延長上にあったが、現在の陶磁器・セラミック製品につながる土器は、自然界から粘土を獲得しただけでは製作できない。成形後に高温で焼成し、カオリン系粘土成分に多く含まれる長石やセリサイトなどをガラス質に化学変化させないと製品とならないものである。また、石器などが打ち砕いて必要な形状を作り出していく「引き算」型の人為加工物であるのに対し、土器（土偶などの土製品を含む）は粘土を成形し造形したり器面を調整しなくてはならず、さらにそれを積み重ねたり変形させて文様装飾を作り出すようになる、いわば「足し算」型の造形物である。特に文様装飾は、次第に彼らによって共同体内で何らかの共通の意味を持つシンボルを採用するようになり、その中でも製作者個々人の技量に応じて巧拙が明確化していく。すなわち、概念の抽象化が進むと同時に、まさに芸術の創出（いうまでもなく、土器出現以前の旧石器段階から世界各地で壁画や身体装飾が顔料を用いて行われており、芸術の発露は認められるが、より一般化したという点で）としての重要性も高い。また、道具として、貯蔵（西アジアでは貯蔵具として出現）、煮沸（東アジアでは煮沸具として出現）の機能を果たすが、いずれにせよ植物の食料としての利用に大きく寄与する要素となる。特に東アジアの出現期の土器は、各地域ともにスス・コゲなどの煮炊きの痕跡を残し、脂肪酸分析の結果からは魚介類の煮沸、土器付着した炭化植物遺体からは有用植物の煮沸、付着炭化物の同位体分析からは植物質食料と海産物の利用がともに認められるなど、多様な利用形態が考えられるが、いずれにせよ食料加工に煮沸具として用いたことは日本列島を含む東アジアでは一般的であったと言ってよい。少なくともドングリ等の種子

類などは、あく抜きも含めて煮沸が必要なことは間違いがない。よって、土器の出現によって食料加工の幅が広がったということは確実である。

以上のように、様々な意味で土器の出現が重要であることに論を重ねる必要はないであろう。以下、本稿では、１）日本列島および東アジアにおける土器出現の年代と位置づけ、２）土器がなぜ作られたのか（その要因と契機）について、３）日本列島における旧石器時代と縄文[1)]時代の時期区分、について、これまでの小林の主張と他の研究者の主張とを適宜に比較しながら、概略したい。

なお、筆者は、本来は山内清男の用法に従って、地紋は「紋」、文様は「文」の字を用いる、よって、「縄紋」「縄紋土器」「縄紋時代」「縄紋文化」とするが、本稿では、一般の用法に従い、「縄文土器」「縄文時代」などと称し、地紋としての施文要素を指す場合のみ「縄紋」「爪形紋」「撚糸紋」などと「紋」の字を用いることを原則としたい。

１．日本列島および東アジアにおける土器出現の年代と位置づけ

1-1 東アジアの土器出現期

中国南部（レジメ１－４）　年代測定がかなり綿密に行われているのは湖南省道県玉蟾岩（Yuchanyan）遺跡で、粗い砂粒を含む脆い胎質で器面に縄紋が施文とされる尖底丸底砲弾型の土器が出土している。土器出土層である T11・T12 の 3H 層炭化材は 14,800 ± 55、14,795 ± 60 である。土器の腐食酸 12,320 ± 120BP、土器の基質 14,810 ± 230BP、同じ層出土木炭 14,490 ± 230、ほか炭化物 7,042 － 6,059 年前、8,327 － 7,449 年前、7,911 － 6,414 年前（中国社会科学院考古科技実験研究中心 1997 年報告）、動物骨約 8,400 年 BP（大貫静夫 2003 年報告）が報告されている。

江西省仙人洞遺跡では、土器が伴う最下層出土炭化物５点が 16,580 ± 260 ～ 18,520 ± 140 を示す（北京大学考古文博学院・江西省文物考古研究所 2014 年報告）が、報告される土器に装飾（縄紋）があり、出現期土器とは考えにくい。図示されてる土器で最も古い土器は、縄紋・双面縄紋陶とされ、上層の土器と同じ可能性が高い。2014 報告 87p には、3C1A 層・3C1B 層など 16,000BP の年代の炭化物がでる層に「条紋陶」（西区最下層）、「条紋」「双面縄紋」（その上）、「素面陶」（東区の最下層）が出土とされ 17,460BP、多くの図示される縄紋などは古くて 2A 層で 11,840BP であり、最下層に無文土器が出土であれば 16,000BP 位の可能性はある。

アムール川中流域・ザバイカル地域（レジメ５）　ゴンチャルカ 1 遺跡、ガーシャ遺跡（12,960 ± 120）など、植物繊維を混入した平底の土器が出土するオシポフカ文化の土器付着物の測定などから、出現期土器が 13,000 ～ 15,000 年前に相当すると考えられる（國木田 2019）。より西方のバイカル地域で國木田により、ストゥディノエ 1 遺跡、ウスチ・メンザ 1 遺跡の土器付着物で 14,000 ～ 13,300 年前などが報告されている。15,000 年前の温暖化後の土器出現と捉えられる。

中国南部が 18,000BP の可能性があり最も古い。次いで、本州北部に 16,000BP に近い年代、東日本で 15,400BP 以降、北九州では 15,950 ～ 15,000BP の間に出現し、アムール川中流域は 15,000BP より若い可能性がある（小林 2023）。

1-2 日本列島の土器出現期の年代（レジメ 6-12）

東北北部（青森県大平山元 1 遺跡、赤平（1）遺跡）、関東（東京都御殿山遺跡、前田耕地遺跡、神奈川県宮ヶ瀬北原遺跡）、九州北部（長崎県福井洞窟遺跡）において、15,000 年より古い年代の土器が確認できる。

東北地方の大平山元Ⅰ遺跡（レジメ８）では ^{14}C 年代で 12,680 ± 140 BP から 13,780 ± 170 BP の６点（うち１点は木炭、他は土器付着物）が得られている。報告時に中村俊夫・辻誠一郎らは最も古い測定値を採用した（谷口編 1999）が、汚染などの要素を除き平均的な値を用いるべきである。土器付着物のうち最も古い値ともっとも新しい値を除いた３測定値が本来同一の年代によると仮定し、OxCal によって Combine すると 12,993 ± 95BP となり、較正年代で 15,830 － 15,260（95.4%）となる。その後、赤平（1）遺跡においても土器共伴炭化物で 13,740BP など古い年代が示された。

関東地方の御殿山遺跡（レジメ９）では、口縁に波状の太い隆線が配される隆線文土器最初頭の土器が出土し、土器付着物と共伴炭化物を測定した。土器付着物 TTKG-B は AMS δ 13C 値が -22‰と海洋リザーバー効果を受けている可能性があり、針葉樹の炭化材 TTKG-C1 の 13,200 ± 70 BP、較正年代で 16,070 － 15,630cal BP（95.4%）で、針葉樹でもありこのうちの若い年代を実際の御殿山遺跡の無文土器終末から隆線文初現期の年代と捉えたい（小林 2017）。前田耕地遺跡（レジメ９）では、森先一貴らによる縄紋草創期前田耕地遺跡住居状遺構出土炭化物の５例が測定された（Morisaki et al.2019）。OxCal による Combine ではχ 2 検定で棄却されるため、ここでは中間的な測定値である 12,945 ± 40BP を較正すると 15,635 － 15,305（95.4%）となり、御殿山例に後続する年代である。

長崎県福井洞窟遺跡（レジメ 10-12）において、工藤雄一郎は、最古段階とする長崎県福井洞窟 3c 層出土炭化材による隆起線文土器の年代を約 16,000 年前とした（工藤 2021 など）。ただし、3c 層からの土器出土は少なく年代測定された炭化物の年代も要検討とされ（三好 2023）、確実な３層下部出土隆線文土器付着物では 12,750 ± 40、較正年代で 15,345 － 15,060cal BP などで（鹿又ほか 2015）、筆者が測定した泉福寺洞穴の隆線文土器（12,220 ± 80）も含め 15,000BP 前後である。

これまで不明な状況とされてきた北海道島について、北海道の草創期については、今回の研究成果として大麻 1 遺跡の押圧縄紋土器が草創期後半に当たる年代であることを示した（小林ほか 2025）が、帯広市大正３遺跡出土土器付着物の再検討を進めた結果、北海道において圧倒的に海産物の利用が多く土器付着物に残されていると考えられる。安定同位体比の検討からも、北海道は海洋リザーバー効果の度合いが強い貝類・魚の利用はもとより、海獣の利用も考えられ、より顕著に海産物の調理の痕跡が残される可能性も考えられる。東北・北陸・九州地方の草創期～早期も内面付着物の約 30 ～ 40% が海洋リザーバー効果の影響が認められ、比較的海産物利用が盛んである。

日本列島での土器出現期すなわち旧石器晩期から縄文草創期の時間的枠組みを示す（小林 2019）。

S0 期　無文土器（大平山元Ⅰ）は、13,000^{14}C BP を遡る値、較正年代で 16,500 ～ 15,000 cal BP、大平山元Ⅰ遺跡土器付着物の中間的な測定値である 13,030 ± 170^{14}C BP を IntCal20 で較正すると 16,115 ～ 15,130 cal BP となる。青森県赤平（1）遺跡の無文土器が出土した層序出土炭化材は

13,444^{14}C BP よりも古い数値で 16,000cal BP を遡る。國木田大らが測定した前田耕地遺跡 17 住の炭化材（Morisaki et al.2019）は 12,865 ～ 13,095 ± 40^{14}C BP と測定されている。以上から、東日本の出現期の無文土器は、16,000cal BP ころを想定しておく。

Ｓ１期　隆線文土器段階、15,540 ～ 12,930cal BP と推測。

S1-0 期　東京都武蔵野市御殿山遺跡例は、口唇上の加飾・豆粒状の短隆線を施文し、隆線文成立期の様相を示す。土器付着物と共伴炭化材を測定し、土器付着物はやや古い数値であるため、レジメ９には炭化材の較正曲線を示すが、13,000^{14}C BP を遡る値、15,500cal BP ころに該当する。

S1-1 期　隆起線文土器段階を３細分した場合の隆線文１期（SFC Ⅱ区・Ⅴ区の太めの隆線）・２期（SFC Ⅰ区の細隆起線文、上野２・万福寺・久保寺南・上黒岩など）併行は 12,800 ～ 12,000^{14}C BP、15,500 ～ 14,000cal BP である。15,540 ～ 14,170cal BP の期間と推定する。

S1-2 期　隆線文３期（SFC Ⅲ区の微隆起線文、黒姫・星光山荘）・隆帯文（宮西・葛原沢Ⅳ・奥ノ仁田）および円孔文（壬）・無紋（仲町）・それらに共伴する爪形紋土器がみられる段階、12,000 ～ 11,500^{14}C BP、14,170 ～ 12,930cal BP の期間と推定する。レジメ 18 に示すように、南九州の隆帯文土器は、同時期には東海地方へ太平洋岸中心に広がっている。

Ｓ２期　隆起線文以降の爪形紋、押圧縄紋、多縄紋、それらに併行する無文土器段階である。

S2-1 期　爪形紋（登谷・薬師寺稲荷台・西鹿田中島）・押圧縄紋（卯ノ木南）・無文（粥見井尻・相谷熊原）土器段階。長野県美女遺跡の葛原沢Ⅱ式（押圧縄文・爪形文）が 11,050 ± 30^{14}C BP など 11,500 ～ 10,000^{14}C BP の測定値である。周年で複数の住居が累積的に構築されているという点で一定規模の集団による定住集落が形成されたという点で重要な、静岡県大鹿窪遺跡の押圧縄紋主体の集落出土炭化材を多数測定し、土器付着物と併せて 12,900 ～ 12,500cal BP に集中している。12,930 ～ 12,485cal BP の期間と推定する。前半に爪形紋単独の時期、後半に押圧縄紋が伴う時期が存在する可能性がある。

S2-2 期　多縄紋（室谷下層式併行）･表裏縄紋（丸尾北、仲道 A）土器段階である。10,900 ～ 9,800^{14}C BP の測定値で 12,485 ～ 11,345cal BP と推定する。

S3-0 期とした早期初頭と捉える表裏縄紋（栃原岩陰）、無文（上台１）、撚糸紋（黒姫洞窟）、日計式（松田）などとの測定値の上での境から、東日本における草創期と早期（S3 期）の境は 11,345cal BP としたが、今後も検討を重ねたい（レジメ 13）。

以上、ロシア東部、中国南部、日本列島ともに、更新世にさかのぼる年代に土器が出現していると考える（レジメ 14-16）。

２．土器がなぜ作られたのか（その要因と契機）

2-1. なぜ作られたのか？（動機の問題）

土器出現の理由は明らかではない。これまで海外では、ロシア・アムール川中流域など魚類の煮沸による魚油採取のために発明されたと考えるなど漁業活動の活発化を契機とする説、地面を掘っ

たピットに焼け石を入れるストーンボイリングから派生したとの説などが紹介されている。日本では、ドングリのアク抜き説（渡辺誠氏の説（渡辺 1968）など)、カゴに粘土を貼った容器が偶然焼けたことによる発明説（小林達雄）など、さまざまな説が提起されてきた。

効率的に摂食するために煮沸することは重要であり、最も古い段階としては東日本で出現していることから日本海側の海流の変化に伴う植生の変化がキーとなっており、環境変動にともなう森林資源の変化、つまりトウヒ属を主とした亜寒帯的な森林環境からしだいに落葉樹林が混合しだした自然環境のなかで生まれた。おそらくは果実・種実類などがしだいに出現してきたことにより、植物質食料のアク抜きなどのために必要とされた可能性はあるだろうと考える。ただし、堅果類が数多く産出されていた後氷期とは異なるので、樹皮やコケ類なども含め、様々な食糧資源を効率的に摂取するのに用いたのだろう（小林 2012)。

2-2．土器の形のなぞ　なぜ底が丸いのか・模様は何のためか・作り方の謎

なぜ草創期・早期の土器の底は丸いのか？という疑問に、藤森栄一は移動的な生活の中で土器を背中にリュックのように背負うためという意見を提起している。また、移動用と考えずとも、河原など凹凸のある不整地で石を組んだり穴を掘ったりして地面に置くのに、丸底は平底より便利であるという意見もある。実際に、神奈川県湘南藤沢キャンパス内（SFC）遺跡群など草創期遺跡で、複数の棒状の礫が住居状遺構などからみつかり、組み合わせて支脚としたという意見が桜井準也氏から提起されている。もともと編籠を模して土器をつくったためという小林達雄説や、熱効率がよい器形との説もある。

文様が突き出す事も、なぜなのかを考えるとなぞである。実用性にはまったく必要ないが、少なくとも縄文草創期隆線文段階からは画一的な文様装飾が施される。隆線文土器の隆線には、多条に横走させる隆線の土器が多いが、関東地方 SFC 遺跡や上野２遺跡、宮の前遺跡、柄沢遺跡、愛媛県上黒岩岩陰遺跡の例のように、単なる直線的な隆線ではなく、格子状、斜行、縦位、三角状の文様のような隆線をもつものがある。これらは､小林達雄など編みカゴの装飾を思わせるとの意見がある。

土器の作り方にも謎は多い。愛媛県上黒岩岩陰遺跡の土器については、以前より器面に残る痕跡がいわゆる獣毛なのか、それに類した別の痕跡なのか、丑野毅に土器破片４点ほどを託し、分析を試みた。その結果、痕跡ははっきりと捉えられ、各破片の痕跡は類したものであること、獣毛のようなキューテクルのある繊維ではなく、直線的で細かな縦筋がみられる植物の繊維であることが確認された。土器製作の際に粘土に植物を練り込んだいわゆる「繊維土器」は縄文草創期から前期にまで、長く行われているが、草創期隆線文段階には獣毛が入るとの意見もある。この点も追求中であるが（小林ほか 2013，2026)、まだ確証は得られない。また、土器の成形法についても薄く剥がれるように破損する土器が多いことから、草創期隆線文から爪形紋土器は、パッチワーク状に製作するとの意見もある。私は CT 観察結果（小林ほか 2026）から粘土紐巻き上げ成形後に薄く引き延ばすと考えている。いずれにせよ、土器製作時に様々な工夫を行っているといえるのだが、何のために何をしているのかは、いまだ不明な点は多い。

３．日本列島における旧石器時代と縄文時代の時期区分

3-1 土器の装備化

１章でみてきた、日本列島を含む東アジアでの土器出現期だが、単に出現したというだけでは歴史的実態は計れない。その内実をみていく必要がある。

(1) 土器の空間的ひろがり（レジメ 17・18）

確実な事例として、無文土器および肥厚口縁に刺突や窩文が施されるのみの土器として、20 遺跡ほどが指摘されているほか、土器は出土しないが石器組成の上で併行期と考えられる遺跡が東北、関東・中部、九州に集中する。

S1 期に遺跡分布が広がるが、北海道、東北南部、中国地方など、土器分布が乏しい地域が見られる。S1-2 期に、南九州系隆帯文土器が四国、東海に広がるほか、紀伊半島で南九州系の可能性がある石斧や煙道付き炉穴が見られるなど、太平洋岸に隆帯文土器文化が盛行した可能性がある。北海道大正３遺跡例は爪形文土器に属するが、口唇部に隆線文を配し、隆線文土器期末期に併行と考えられる。S1-2 期において、土器分布の広がりが列島全域に及んだといえる。

(2) 保有土器量と定住化（レジメ 18）

土器の普及については、土器がどの程度普及していたのかを土器の保有率、および土器保有量で検討する（小林 2020a）。また、土器量の増加を定住の促進と裏表の関係として捉えるため、住居施設の在り方を検討する（小林 2020b）。

S0 期には半分以下の遺跡に土器が 1 点程度の出土で認められるが、その後土器が伴う遺跡が隆線文期で一気に増加する。草創期を通じて出土 1 個体の遺跡が圧倒的に多いが、時期が新しくなるにつれて一遺跡での出土個体数が増えていく。

時期が増すごとに居住施設は増加する。S1-2 期に急増し S2-2 期に減っているが、S2-2 期に遺跡がなくなる南九州の動向が影響している。S2-1 期における住居の増加は、図 4-4 に示す竪穴住居化、かつ深度が増えていくことに見るように、ヤンガードリアス小氷期とよばれる寒冷化に伴う竪穴住居の定型化によろう。個別の状況では、代表的な集落遺跡の住居数と土器個体数、住居 1 軒あたりに換算した土器量とは増えていく。定住化が進むことと、土器保有量が増すことは相関関係にあろう。

(3) 生活財としての土器の広がり（レジメ 19）

草創期土器は比較的小型で、深鉢主体であり器形的・法量的にあまりバリエーションがないことは様々に指摘されている。土器成立の要因についても不明な点が多いが、ススコゲの付着例から煮炊きの道具であることは間違いない。筆者は、土器付着物の炭素 13 同位体比から、調理物に海産物が調理されている割合を求めた。草創期の事例が少なく、早期と併せた集計であるが、内面付着物の 34% が海洋リザーバー効果の影響、すなわち海産物の調理痕跡である可能性を摘出した。地域毎に見ると早期の事例を主とするが北海道では海洋リザーバー効果が圧倒的であり草創期においても大正３遺跡にそれが表れている。東北・北陸・九州に比較的多く海洋リザーバー効果が認められ、サケ・マスの利用を含めて海産物の調理が土器で行われていたといえる（小林 2018）。

定住化が進み、調理具としての重要度が増し、土器作りにかける時間も増えることで装飾化が進み、地域毎に細かな違いを持った土器群が展開し、考古学的に型式と把握できるようになる。まさに縄文土器文化の装備品となったと評価するべきである。

3-2 縄文文化の成立

土器の成立が氷河期に遡ることが確実となったため、動植物相の変化によって新たな生活様式が発生し縄文時代となったという過去の説明は不可となった。日本の縄文時代の始まりは、世界的に見ても特異な人類史の変化を示している。生態環境の変動と大きく関連していることは間違いない（レジメ 20)。

縄文文化の始まりをどこに求めるかには、３つの意見がある。最も一般的な意見は、土器の初現―すなわち現在の所は大平山元Ⅰ遺跡とそれに併行する神子柴・長者久保の石器文化の段階―をもって「縄文時代」とする小林達雄（1996）の意見である。しかし、共伴する石器文化は明らかに晩期旧石器時代の産物であり、かつ出現期の土器は列島全体でも少数に過ぎず、同時期のほとんどの遺跡には土器は認められない。また、それらの土器には文様もなく、定型的な形も認めがたい。即ち、旧石器時代の文化の中に、先行的に土器が出現したと見ることも可能である。さらに土器の発生という点に限れば、焼成粘土塊や生焼け状の土製容器を含め、土器という器物自体はさらにさかのぼる可能性が高く、縄紋時代の底（始まりの時期）をその観点からは決定できない。

２つめの意見として、谷口康浩（2011）は、石皿・磨石という植物質食料加工技術が卓越し、土器の多量保有や明確な集落が現れて定住的な生活が明かとなる縄紋早期撚糸紋土器段階からを縄紋時代とするべきと主張している。しかし、縄紋文化に連続する縄紋草創期段階の位置づけが不明確となってしまう。

３つめの意見として、筆者は、縄文時代の始まりという画期について、①土器の出現と普及、②居住施設の定立（レジメ 21)、③弓矢の一般化、④石偶・土偶の出現を縄文文化成立の主要な要因と捉える（小林 2009・2010)。その外の文化要素として、⑤磨石・台石など植物加工具の増加、⑥海産物利用、⑦石匙型石器など縄文的な汎用石器などが挙げられる。土器以外の要素とした竪穴住居の確立、有舌尖頭器の盛行や石鏃の出現は隆線文土器期に生じており、土偶の出現は爪形文土器期（13,000cal BP ころ）に下る可能性が高いが、上黒岩岩陰遺跡の石偶［春成・小林編 2009］は隆線文期に伴う。日本列島における新石器文化である縄文文化のはじまりは、土器の出現期である大平山元Ⅰ遺跡など無文土器の出現（16,000cal BP ころ)、列島各地に土器が広まり文様装飾が確立する隆線文土器の普及期（15,000cal BP 代なかばころ）のいずれかの時期に、旧石器文化からの文化変容の画期を求めたい（レジメ 23　小林 2012)。

いずれにせよ、なぜ土器が氷期に生み出されたのかの本当の答えはわかっていない。おおきな謎が、まだ残されている（レジメ 24)。

本研究は、科研費国際共同研究加速基金・強化(B)(19KK0017:代表小林謙一:2019-2024 年度,)「ユーラシアにおける土器出現の生態史」、基盤研究 A（一般）「高精度年代体系による東アジア新石器文化過程―地域文化の成立と相互関係―」（22H00019：代表小林謙一：2022-2026 年度）の成果を用いている。

註

1）筆者は山内清男の語に従い「縄紋」の語を用いるが、本稿では「縄文」とする。また、細隆起線文・微隆起線文は個別の隆線の技法に応じて使い分け、土器群全体としては「隆線文土器」と称する。

参考文献

遠部慎・宮田佳樹・小林謙一 2012「東海地方における縄文時代草創期から早期の土器の炭素 14 年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 172 集，国立歴史民俗博物館

工藤雄一郎 2024『縄文時代草創期の年代学』雄山閣

國木田大 2019「土器付着物でわかる年代と食生活」『土器のはじまり』小林謙一編、同成社

小林謙一 1993「縄文草創期隆線文土器の施文方法について」『慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡』第 1 巻総論　慶應義塾

小林謙一・江坂輝彌 1993「上黒岩岩陰遺跡出土の草創期土器」『利根川』14，利根川同人

小林謙一 1994「第 2 節縄文時代草創期の調査　1 隆線文土器」「SFCV-7 区追加資料について」51-54 頁『湘南藤沢キャンパス内遺跡　情報基盤センター（仮称)』慶應義塾湘南藤沢キャンパス埋蔵文化財調査団

小林謙一 1996「境川下流域を中心とした縄紋時代草創期隆線紋土器の編年」『考古学講座　かながわの縄文文化の起源を探る　パート２』神奈川県考古学会

小林謙一 2007「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』137

小林謙一編著 2008『第 58 回歴博フォーラム　縄文時代のはじまり―愛媛県上黒岩遺跡の研究成果―』国立歴史民俗博物館・六一書房

小林謙一 2009「日本列島における土器初現期の諸問題」『日本考古学協会第 75 回総会　研究発表要旨』日本考古学協会

小林謙一・坂本稔・工藤雄一郎 2009 国立歴史民俗博物館図録『国立歴史民俗博物館企画展示「縄文はいつから !?―１万５千年前になにがおこったのか―」』（企画展示図録）国立歴史民俗博物館

小林謙一 2010『縄紋文化のはじまり―上黒岩岩陰遺跡―』遺跡を学ぶ 70，新泉社

小林謙一 2012「日本列島における出現期の土器の様相」『縄文はいつから！？地球環境の変動と縄文文化』新泉社

小林謙一 2012「トピックス縄文はいつから？」『じっきょう　地歴・公民科資料№.74』実教出版株式会社

小林謙一・坂本稔・村田六郎太・加曽利貝塚土器づくり同好会 2013「縄文土器製作に関する予備的実験―縄文時代草創期土器の混和材による縮小率の検討―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 175 集，国立歴史民俗博物館

小林謙一 2014「東アジアにおける土器出現期の年代研究の現状と課題」『紀要』史学第 59 号，中央大学文学部

小林謙一 2018「縄紋時代草創期・早期土器付着物の同位体比の検討」『紀要』史学第 63 号（通巻第 271 号），中央大学文学部

小林謙一 2019『縄紋時代の実年代講座』同成社

小林謙一編 2019『土器のはじまり』市民の考古学 16，同成社

小林謙一 2020a「縄紋草創期遺跡の遺物量」『中央大学考古学論集』1　小林謙一還暦記念，中央考古学会編，六一書房

小林謙一 2020b「縄紋時代草創期の住居状遺構からみた定住化」『考古学と歴史学』中央大学人文科学研究所研究叢書 73，小林謙一編著，中央大学出版部

小林謙一・尾嵜大真・大森貴之・米田穣 2022「大鹿窪遺跡令和２年度調査出土炭化物の炭素 14 年代」『史跡大鹿窪遺跡発掘調査報告書―史跡整備事業に伴う再発掘調査―』富士宮市文化財調査報告書第 56 集

小林謙一 2022「史跡大鹿窪遺跡の年代と定住生活について」『史跡大鹿窪遺跡の歴史と環境　令和３年度埋蔵文化財シンポジウム事業発表要旨集』富士宮市教育委員会

小林謙一　2023「縄文土器の成立と定着」『何が歴史を動かしたのか』第 1 巻自然史と旧石器・縄文考古学　春成秀爾編，雄山閣

小林謙一・佐藤智生・相原淳一　2024「青森県における縄文時代草創期～早期土器の年代測定（2)」『研究紀要』第 29 号、青森県埋蔵文化財調査センター

小林謙一　2025「日本列島における土器出現をさぐる―「東アジアの土器出現の生態史」から―」『東京の遺跡』129，東京考古談話会

小林謙一・横山英介・相原淳一・米田穣・尾嵜大真・大森貴之　2025「北海道における草創期土器の拡散―大麻 1 遺跡の年代測定研究―」『日本考古学協会第 91 回総会研究発表要旨』

小林謙一・宮田将寛　2026「三鷹市井の頭池遺跡群 A 出土縄紋草創期隆線文土器の CT 撮影について」『三鷹市文化財年報・研究紀要８　令和６(2024）年』三鷹市スポーツと文化部生涯学習課

小林達雄　1996『縄文人の世界』朝日新聞社

鹿又喜隆・村田弘之・梅川隆寛・洪惠媛・柳田俊雄・阿子島香・鈴木三男・井上巌・早瀬亮介・小原圭一 2015「九州地方における洞穴遺跡の研究―長崎県福井洞穴第三次発掘調査報告書―」『東北大学総合学術博物館紀要』№14，東北大学総合学術博物館

立神倫史・小林謙一　2019「鹿児島県における縄紋時代草創期～早期の年代測定事例　－土器付着炭化物を中心に－」『縄文の森から』平成 29 年度年報　第 11 号 ，鹿児島県立埋蔵文化財センター

谷口康浩編　1999『大平山元Ⅰ遺跡の考古学的調査』大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団

春成秀爾・小林謙一編　2009「愛媛県上黒岩遺跡の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 154 集

三好元樹　2023「福井洞窟の縄文時代初頭の年代」『九州旧石器』第 27 号

渡辺誠　1968「日本列島における土器出現の背景をめぐって」『古代文化』第 20 巻８・９号

Kazuki Morisaki, Noriyoshi Oda, Dai Kunikita, Yuka Sasaki,Yasuko Kuronuma, Akira Iwase, Takeshi Yamazaki, Naoichiro Ichida& Hiroyuki Sato 2019 Sedentism, pottery and inland fishing in Late Glacial Japan: a reassessment of the Maedakochi site, Antiquity 93 372: 1442-1459

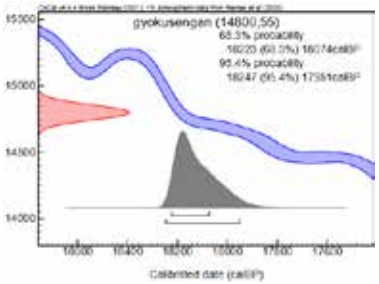
1．日本列島および東アジアにおける土器出現の年代と位置づけ
1-1　東アジアの土器出現期

中国南部　年代測定がかなり綿密に行われているのは湖南省道県玉蟾岩（Yuchanyan）遺跡で、粗い砂粒を含む脆い胎質で器面に縄紋が施文とされる尖底丸底砲弾型の土器が出土している。土器出土層であるT11・T12の3H層炭化材は14800±55, 14795±60である。

広西仙人洞遺跡では、土器が伴う最下層出土炭化物5点が16580±260～18520±140を示すが、報告される土器に装飾（縄紋）があり、出現期土器とは考えにくい。

アムール川中流域・ザバイカル地域　ゴンチャルカ1遺跡、ガーシャ遺跡（12960±120）など、植物繊維を混入した平底の土器が出土するオシポフカ文化の土器付着物の測定などから、出現期土器が13,000～15,000年前に相当すると考えられる（國木田2019）。より西方の座バイカル地域でお國木田により、ストゥディノエ１遺跡、ウスチ・メンザ1遺跡の土器付着物で14000～13300年前などが報告されている。15000年前の温暖化後の土器出現と捉えられる。

玉蟾岩



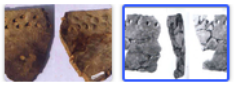
炭　14800±55,
18250－17950cal BP

レジメ1

仙人洞

機関番号	所在地	遺跡	出土区・層位	試料			^{14}C		BP	文献	備考
UCR3439	中国南部	仙人洞	西区3C1B層（土器が伴う最下層）	炭			16730	±	120	Xiaohong et al.2012	
AA15005	中国南部	仙人洞	西区3C1B層（土器が伴う最下層）	炭			17420	±	130	Xiaohong et al.2012	
UCR3440	中国南部	仙人洞	西区3C1B層（土器が伴う最下層）	炭			18520	±	140	Xiaohong et al.2012	
BA95141	中国南部	仙人洞	東区2B層（土器が伴う最下層）	炭			16580	±	260	Xiaohong et al.2012	
BA95140	中国南部	仙人洞	東区2B層（土器が伴う最下層）	炭			17460	±	210	Xiaohong et al.2012	

中国江西（Jiangxi）省北部にある洞窟「仙人洞（Xianrendong）」で発見された、世界最古とみられる陶器片（撮影日不明）。(c)AFP/SCIENCE/AAAS



2012／6
https://www.afpbb.com/articles/-/2886850?pid=9189739

【6月29日 AFP】中国江西（Jiangxi）省で、世界最古とみられる陶器片が発見された。約2万年前のもので、これまで最古とされていたものより2000年ほど古いという。28日、米科学誌サイエンス（Science）に論文が発表された。

陶器片は、江西省北部、長江（Yangtze）から南へ約100キロにある洞窟「仙人洞（Xianrendong）」の中で発見された。放射性炭素年代測定を行った結果、洞窟には約2万9000年前から人間が暮らしており、約1万7500年前にいったん放棄された後、1万4500年前から1万2000年前まで再び使われていたことが分かっている。

今回発見された陶器片の年代は、最終氷期極大期（2万5000年前から1万9000年前）に当たり、農耕が始まる以前に作られた可能性もある。論文に併載されたエルサレム・ヘブライ大学（Hebrew University of Jerusalem）東アジア学科のGideon Shelach教授の解説によれば、「最終氷期極大期では資源が不足していたため、食料を集めて処理するより良い方法を考え出す必要があった」という。

論文は北京大学（Peking University）、米ボストン大学（Boston University）、米ハーバード大学（Harvard University）、独テュービンゲン大学（Eberhard Karls Universitaet Tuebingen）の研究者らによって執筆された。(c)AFP

レジメ2

せんにんどう　ひがし　　せんにんどう　にし　　ちょうとうかん

仙人洞　　土器の報告なし

仙人洞東区						仙人洞西区						吊桶环					
层位	实验室号	年代	偏差	物质	样本号	层位	实验室号	年代	偏差	物质	样本号	层位	实验室号	年代	偏差	物质	样本号
①B	BA00003	19634	186	兽骨	1450												
②A	BA00004	10456	118	兽忖	1581												
②A	BA95138	11840	150	炭													
②A①	UCR 3558	11020	60	人骨	902												
②A②	BA 99038	11840	380	兽忖													
						③B①	BA 93181	14610	290	炭	076						
						③B②	UCR 3561	12420	80	人骨	748						
						③C①A	BA 00006	15655	194	兽忖	1122	D	BA 00014	15531	214	兽忖	3067
②A③	BA 95139	16110	140	炭		③C①A	UCR 3562	16010	70	人骨	1035						
②B	BA 00015	16301	157	兽骨	1771	③C①A	BA 95143	16340	200	炭							

せんにんどう　ひがし

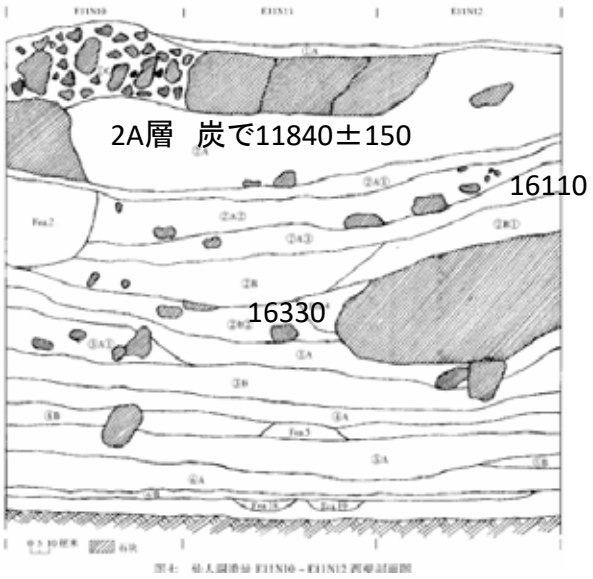
土器最古は東区2B層－17460±460　14C BP

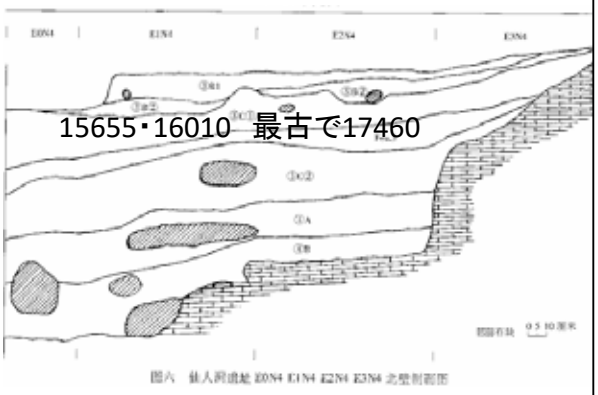
図示されている土器のほとんどは2A層など上層→　炭化物で11840±150BP

仙人洞与吊桶坏（土ではなく王）（環）　せんにんどう・ちょうとうかん
北京大学考古文博学院・江西省文物考古研究所
2014年

レジメ3

東区　　西区

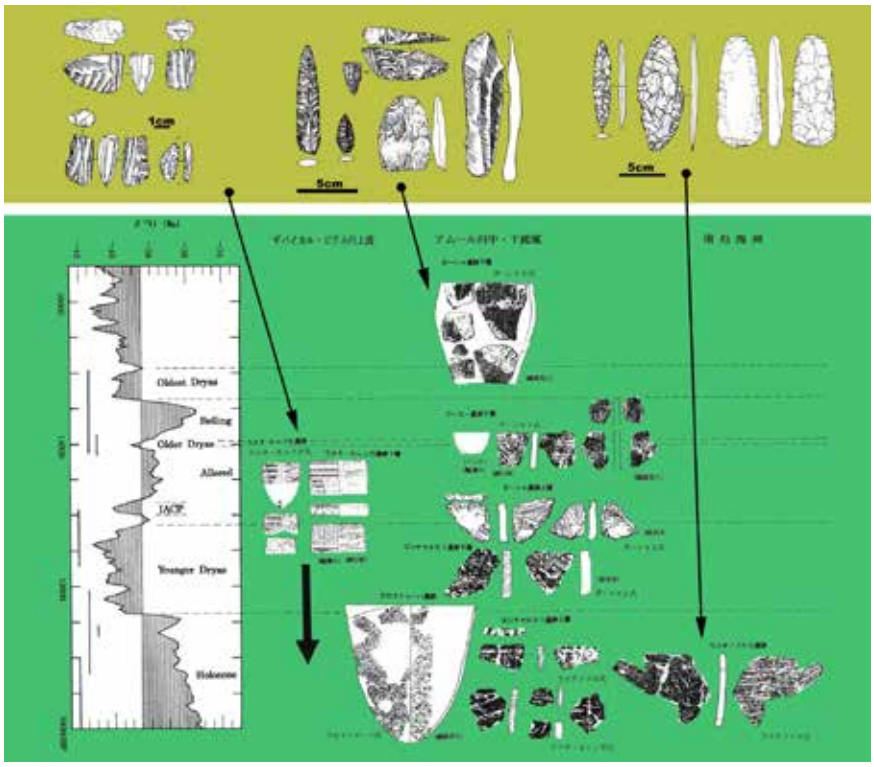




2014報告87pには、3C1A層・3C1B層など16000BPの年代の炭化物がでる層に
「条紋陶」（西区最下層）、「条紋」「双面縄紋」（その上）、「素面陶」（東区の最下層）
が出土とされる。→最古で17460BP、多くの図示される縄紋などは古くて2A層で11840BP
縄紋はそうひがんと同じくらいでは？　最下層に無文土器なら16000BP位の可能性はある

仙人洞　　北京大学考古文博学院・江西省文物考古研究所2014年　　レジメ4

- シベリア　(小畑弘己2009「ロシア極東の初期の土器」)
  国立歴史民俗博物館2009『縄文はいつから!？』



レジメ5

日本列島における出現期土器の変遷



国立歴史民俗博物館2009『縄文はいつから!？』小林

レジメ6

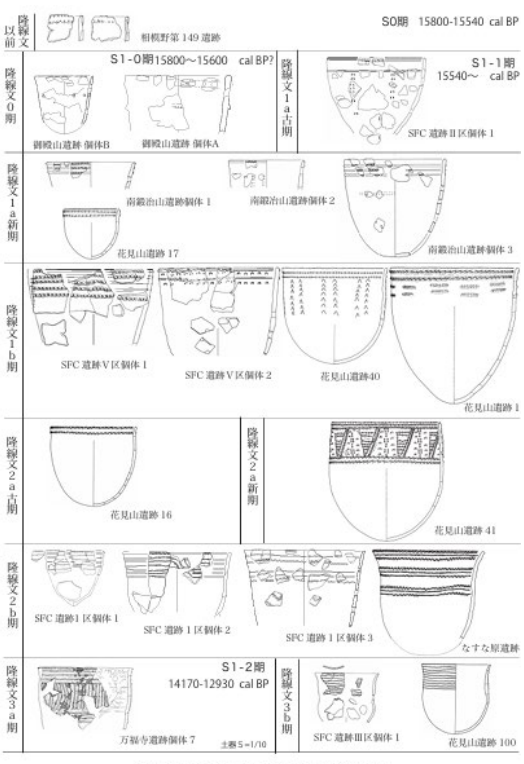
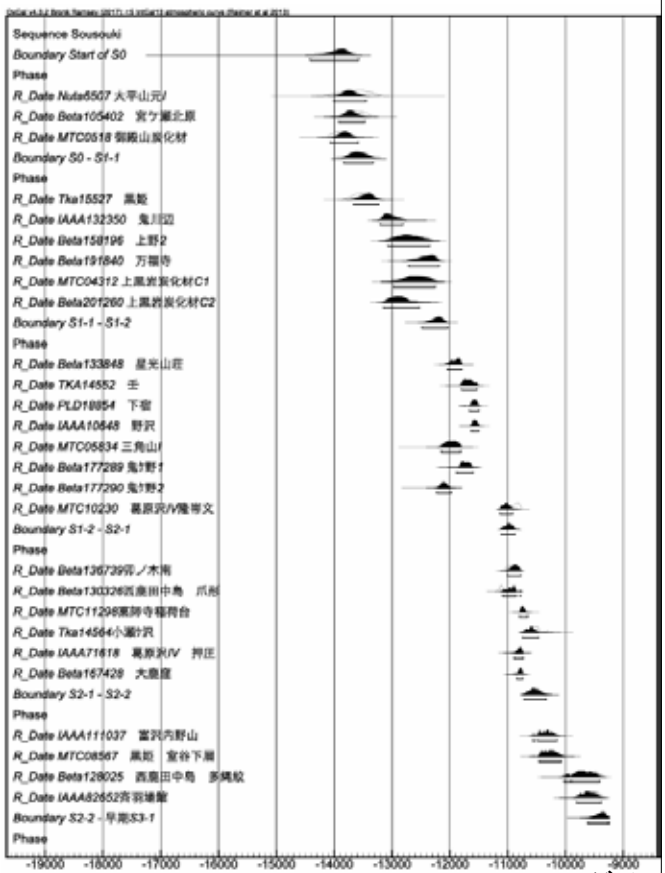


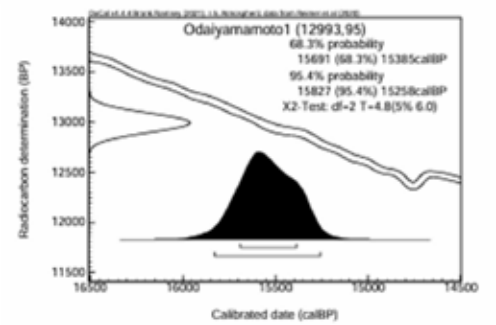
図５　南西関東における隆線文土器型式編年

小林謙一2023「縄文土器の成立と定着」『何が歴史を動かしたのか』第1巻自然史と旧石器・縄文考古学　春成秀爾編，雄山閣



レジメ7

大平山元Ⅰ遺跡　既存データの再検討



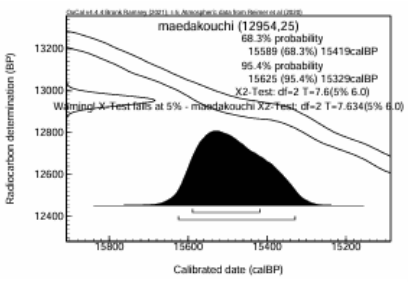
東北地方の大平山元Ⅰ遺跡では14C年代で12,680±140 BPから13,780±170 BPの6点（うち1点は木炭、他は土器付着物）が得られている。報告時に中村俊夫・辻誠一郎らは最も古い測定値を採用した（谷口編1999）が、汚染などの要素を除き平均的な値を用いるべきである。土器付着物のうち最も古い値ともっとも新しい値を除いた3測定値が本来同一の年代によると仮定し、OxCalによってCombineすると12993±95BPとなり、較正年代で15830－15260（95.4%）となる。その後、赤平（1）遺跡においても無文土器共伴炭化物で13740BPなど古い年代が示された。

土器付着物は、同一個体と考えられる土器破片から5点が採取・測定され、14C年代で13,780±170^{14}C BP～12,680±140^{14}C BPの幅をもって測定された。平均値は13,070±440^{14}C BPと報告される（中村・辻1999）。土器出土のⅢ層から3点の炭化材が検出され、年代測定されている。そのうち炭化材E5-100（針葉樹）は、13,480±70^{14}C BPの年代値だが、他の2つの炭化材は縄紋早期に当たる7,000^{14}C BP代の年代値である。

明らかに混在と思われる新しい年代を示す炭化物を除いた計6点の重加算平均をとると13288±50^{14}C BP、較正年代で16170 ～15780cal BP（95.4%）となる。草創期の測定例を土器型式ごとにまとめて連続的に推移すると仮定し、そのグループ間の時間幅を推定するContiguous phasesプログラムを用いて無紋土器の最初の年代を算出すると、あくまで統計的な推測値であるが2σの有効範囲で16,372～15,533cal BPのなかに含まれ、ベイズ統計でもっとも確率密度が高くなるMedianの値で15,862cal BPを示す。現時点においては大平山元Ⅰ遺跡の無紋土器の年代は、15,800年前頃と捉えておく。

レジメ8

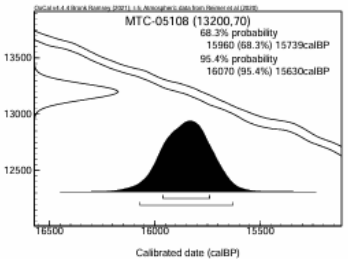
前田耕地遺跡



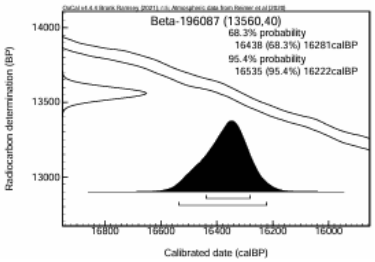
前田耕地遺跡では、森先一貴らによる縄紋草創期前田耕地遺跡住居状遺構出土炭化物の測定が5例示された（Morisaki et al.2019）。OxCalによるCombineではχ2検定で棄却されるため、ここでは中間的な測定値である12945±40BPを較正すると15635－15305（95.4%）となり、御殿山例に後続する年代である。

御殿山遺跡

針葉樹の炭化材TTKG-C1



土器付着物TTKG-B



関東地方の御殿山遺跡は、口縁に波状の太い隆線が配される隆線文土器最初頭の土器が出土し、土器付着物と共伴炭化物を測定した。土器付着物TTKG-BはAMS δ^{13}C値が-22‰と海洋リザーバー効果を受けている可能性があり、針葉樹の炭化材TTKG-C1の13200±70 BPを重視し、較正年代で16070－15630cal BP（95.4%）となるが、針葉樹でもありこのうちの若い年代に属するであろう（小林2017）。

レジメ9

長崎県**福井洞穴遺跡**において、工藤雄一郎は、最古段階とする長崎県福井洞窟 3c 層出土炭化材による隆起線文土器の年代を約 16,000 年前と指摘した（工藤2021など）。ただし、3c層からの土器出土は少なく年代測定された炭化物の年代も要検討とされ（三好2023）、確実な3層下部出土隆線文土器付着物では12750±40、較正年代で15345－15060cal BPなどで（鹿又ほか2015）、筆者が測定した泉福寺洞穴の隆線文土器（12220±80）も含め15000BP 前後である。

ほとんどの福井洞穴出土土器付着物は海洋リザーバー効果の影響が考慮され、2･3層の隆線文･爪形紋土器の年代は1200014CBP代の新しい前半代が中心と考えられ、較正年代では15000～14000年前ころ。
福井9層以下の旧石器時代の層出土炭化材は14100±40以上の古さを持ち、17390cal BP以前と捉えられる。Medianの値でみると土器が出土しない7層は17480～16120BP、同じく4層は15985BPまで、無紋224･豆粒文223（南原式並行）の3c層･隆線文古202の3a層は14830BPまで、隆線文の2層14345BPまで、河陽FのS1-2爪形紋は13235BPまで、大原DのS2期条痕紋は12600BPまで、やや間が空くが早期政所式が11400～11200BPと仮設したい。

レジメ10

三好元樹2023「福井洞窟の縄文時代初頭の年代」『九州旧石器』第27号

これらを前提に、以下で 3c 層の評価をおこなう。前章の確認から導き出せる、『報告書』の 3c 層の位置づけをめぐる争点として、以下の 3 点が挙げられる。

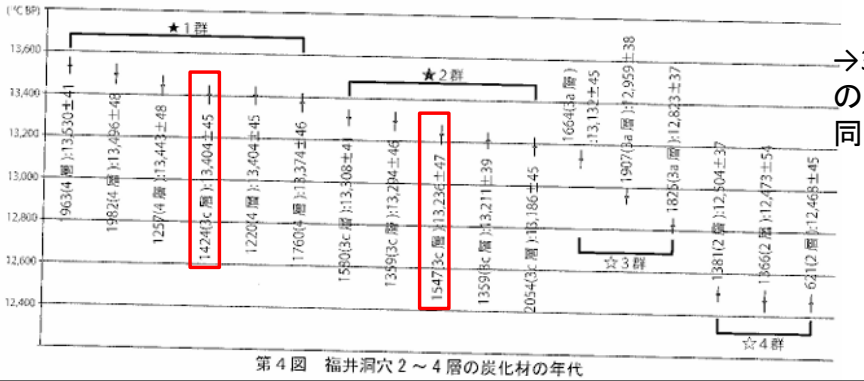
①南壁の 5.8m 付近で 1 点のみ出土している土器は 3c 層のものといえるか。

②南壁 3.3 ～ 3.8m 付近で出土している 3c 層出土土器の年代は、重複して出土している 1424 炭化材の年代とできるか。

③南壁 3.3 ～ 3.8m 付近で出土している 3c 層出土土器の年代は、南壁 4.5m 付近で、同一層に含まれる 1547 炭化材の年代とできるか。

まず、①については、上述のとおり地層断面図にみられる堆積状況から、上層から混入した可能性が想定される。また、②については、1424 は 1 群炭化材としては 1 点だけ遊離し、2 群炭化材より上位で出土している。原因を説明できるわけではないが、何らかの理由で混入したものと考えるのが妥当だろう。

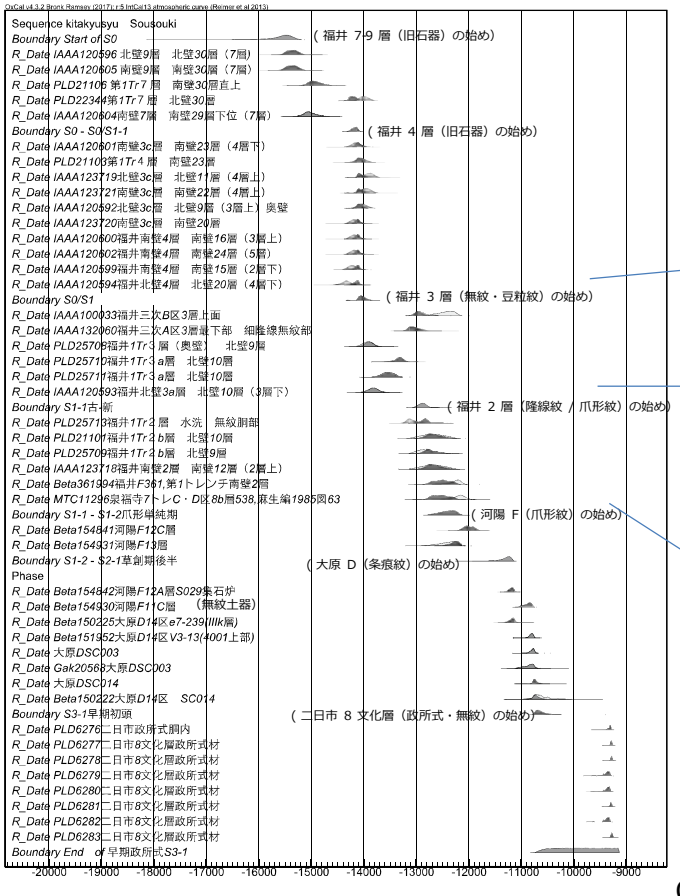
③は、3c 層のなかでも「現場層序」の南壁 22 層（『報告書』Fig. 195 ほか）のなかに、1547 炭化材と 3c 層出土土器が含まれており、それが共伴とできるかという問題である。1547 炭化材が下位で、3c 層出土土器が上位で出土しているが、南壁 22 層が一括性の堆積物と考えると、同時に残されたことになる。一方、南壁 22 層がある程度の時間幅をもって堆積したか、あるいは下層、もしくは上層からの遺物が入り込みうるような堆積だったとすると、1547 炭化材と 3c 層出土土器が異なる時期のものである可能性が生じうる。



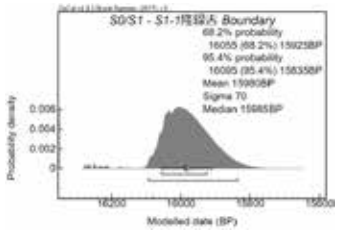
第４図　福井洞穴２～４層の炭化材の年代

→3c層出土土器の年代は3a層と同じ頃か？

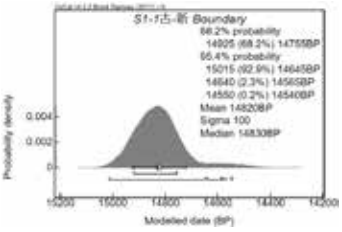
レジメ11



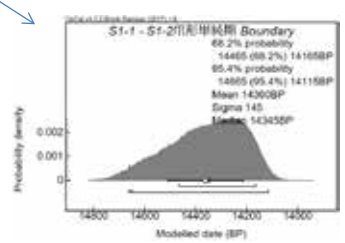
Cal BC



福井４層/3層境（土器出現の最も古い可能性）



福井３層/2層境（確実に土器がある年代）



福井２層の終わりの推定年代

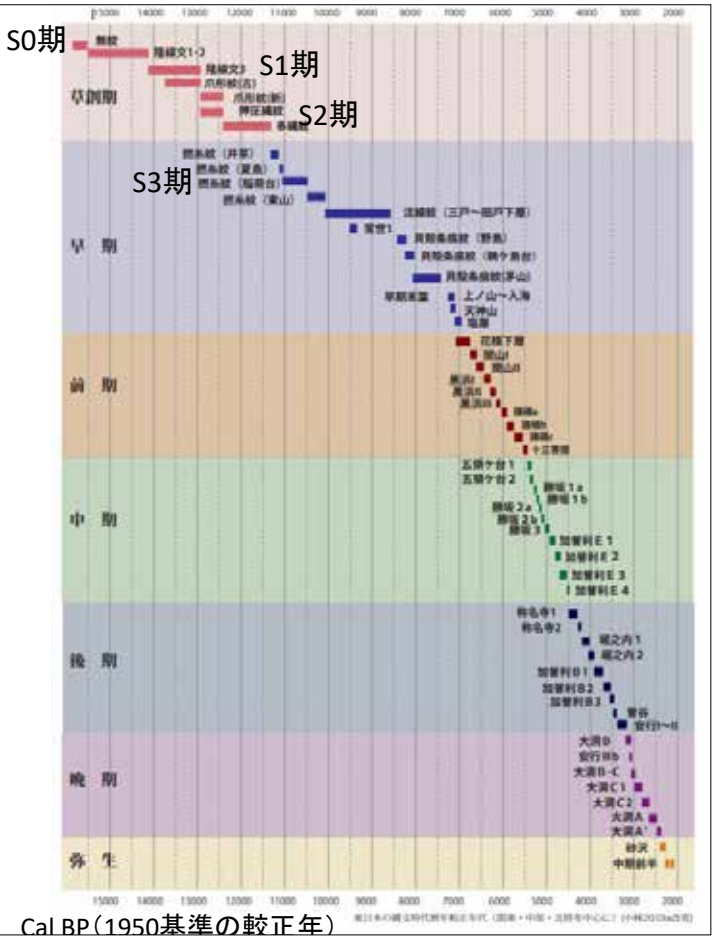
レジメ12

縄紋時代の年代

縄紋時代各時期の型式別の炭素14年代測定結果から較正年代を算出。

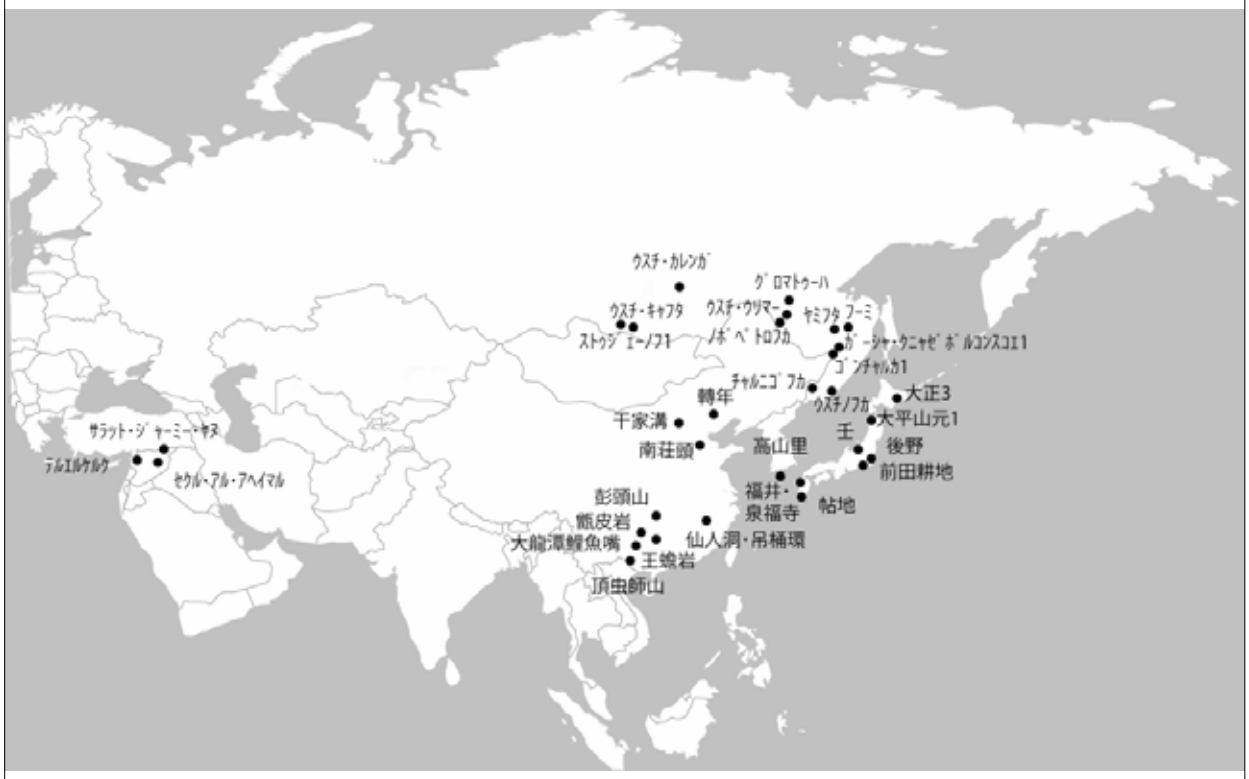
縄紋時代の関東・甲信・北陸の中部日本、岩手・福島県の南東北地方の土器型式別の暦年較正年代の時間幅を示す。

横線は、各時期の推定される較正年代の時間幅。



小林2019『縄紋時代の実年代講座』187頁改編

レジメ13



小林謙一編2019「土器のはじまり」同成社

レジメ14

静岡県大鹿窪集落の変遷

大鹿窪Ⅰ期　土器がみつかっていないが無文段階(S0期）～隆線文古S1-1期?16000-15000BP?

大鹿窪Ⅱ期　隆線文の新期･隆帯文（S1-2期）　*測定　13300～12900～12700BP?　土器の広がり

大鹿窪Ⅲ期　（爪形文）･押圧縄文(S2-1期）　*測定　12900～12600～12450BP　定住集落化

南九州		北九州		東日本		アムール中流		沿海州		華北		中国南部		朝鮮半島		西アジア	
												仙人洞	20000?				
												玉蟾岩	18000				
		（福井4層）	16000									廟岩					
				大平山元I	15800												
竹ノ下		福井3層	15200	御殿山	15200												
		福井3層上	14800	隆線文1期	15000	オシポフカ文化		大鹿窪1期									
三角山1古	14500	泉福寺隆線	14500	隆線文2期	14500							甑皮岩	14500				
三角山1新	14000	福井2層	14400														
奥ノ仁田	13500	河陽F	13200	隆線文3期	13500			大鹿窪2期									
				爪形紋													
建昌城跡	13000	大原D	12600	押圧縄紋	13000			大鹿窪3期									
				多縄紋	12000					于家溝	11800						
岩本式古	11700	二日市･政所	11400	表裏縄紋	11500			ウスチノフカ３		扁扁洞	10500	吊桶環洞窟					
														高山里	10000?		
																セクル･アル･アヘイマル	
																	8900

東アジア土器成立期　小林2019『土器のはじまり』

レジメ15

- 東アジア土器の出現年代　まとめ

中国南部が18000BPの可能性があり最も古い。次いで、本州北部に16000BPに近い年代、東日本で15400BP以降、北九州では15950～15000BPの間に出現しアムール川中流域は15000BPより若い可能性がある。

ロシア東部、中国南部、日本列島ともに、更新世にさかのぼる年代に土器が出現していると考えるが、いまだ精密にその年代を絞り込むことは難しい。第１に、出現期土器の付着炭化物や土器に確実に伴う試料の年代測定数が少ないこと、第２に海洋リザーバー効果や洞窟遺跡における貝殻・骨試料などにおけるリザーバー効果などが不明瞭な部分があること、第３にIntCal13の較正曲線で16,500年前から15,000年前頃まで較正曲線がフラットな年代があり、絞り込みが難しいとされた）。IntCal13較正曲線は、水月湖などの湖底堆積物による年縞試料により改訂されたが、水月湖データは他との整合性に検討が必要とされる。IntCal20において石筍のデータの比重が増えたとされるが、更新世の較正年代の確度が十分とはいえない段階にあることは変わらない（工藤2012・2021。

レジメ16

1.　土器の空間的ひろがり

土器の広がり　14500年前



縄文時代草創期の土器出土主要遺跡

縄文文化のはじまり　81p

レジメ17

「縄文はいつから！？」図録（小林編2009）

3－1　日本列島での土器の広がり



図３　土器の拡がり

保有土器量と定住化

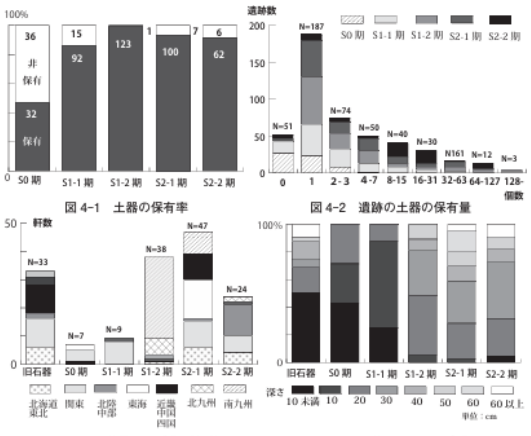


図 4-1　土器の保有率

図 4-2　遺跡の土器の保有量

図 4-3　居住施設の時期別軒数

図 4-4　住居の深さの変化

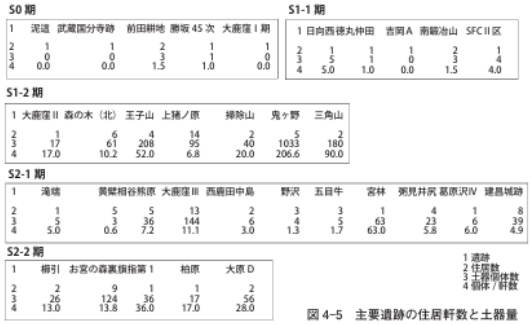


図 4-5　主要遺跡の住居軒数と土器量

小林謙一2023「縄文土器の成立と定着」『何が歴史を動かしたのか』
第1巻自然史と旧石器・縄文考古学　春成秀爾編，雄山閣

レジメ18

草創期・早期土器付着物（小林2018）

早期・草創期

IRMSによる13C値の同位体比と炭素年代がその比定年代より100 14Cyr以上古い試料

表3　炭素14年代が古い値を示す早期・草創期土器付着炭化物のδ^{13}C値ごとの出現頻
14CBPとIRMS−δ13Cを測定した試料（部位数）

δ^{13}C値(‰)	IRMSによる測定						AMSのみ測定
	−26‰未満	−26～−24‰	−24～22‰	−22～20‰	−20～18‰	−18‰以上	
測定数	34	66	35	7	3	0	242
整合的な試料	34	61	0	0	0	0	190
炭素14年代の古い試料	0	5	35	7	3	0	52
	0%	8%	100%	100%	100%	0%	21%

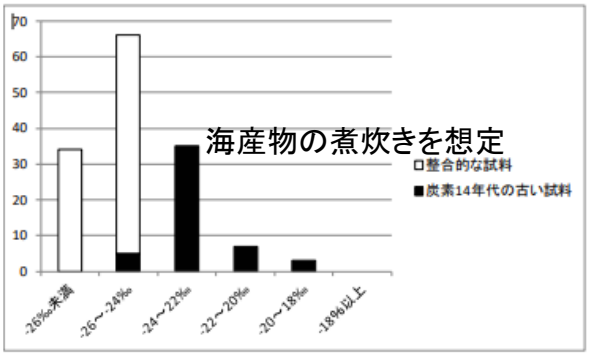


図２　炭素 14 年代が古い値を示す草創期・早期土器付着炭化物のδ13C 値ごとの出現頻度

北海道において圧倒的に海産物の利用が多い。
東北・北陸・九州地方も内面付着物の約30～40%が海洋リザーバー効果の影響が認められ、比較的海産物利用が盛んである。
東海・中部・中四国近畿はきわめて低い。

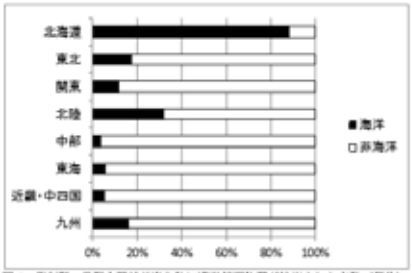
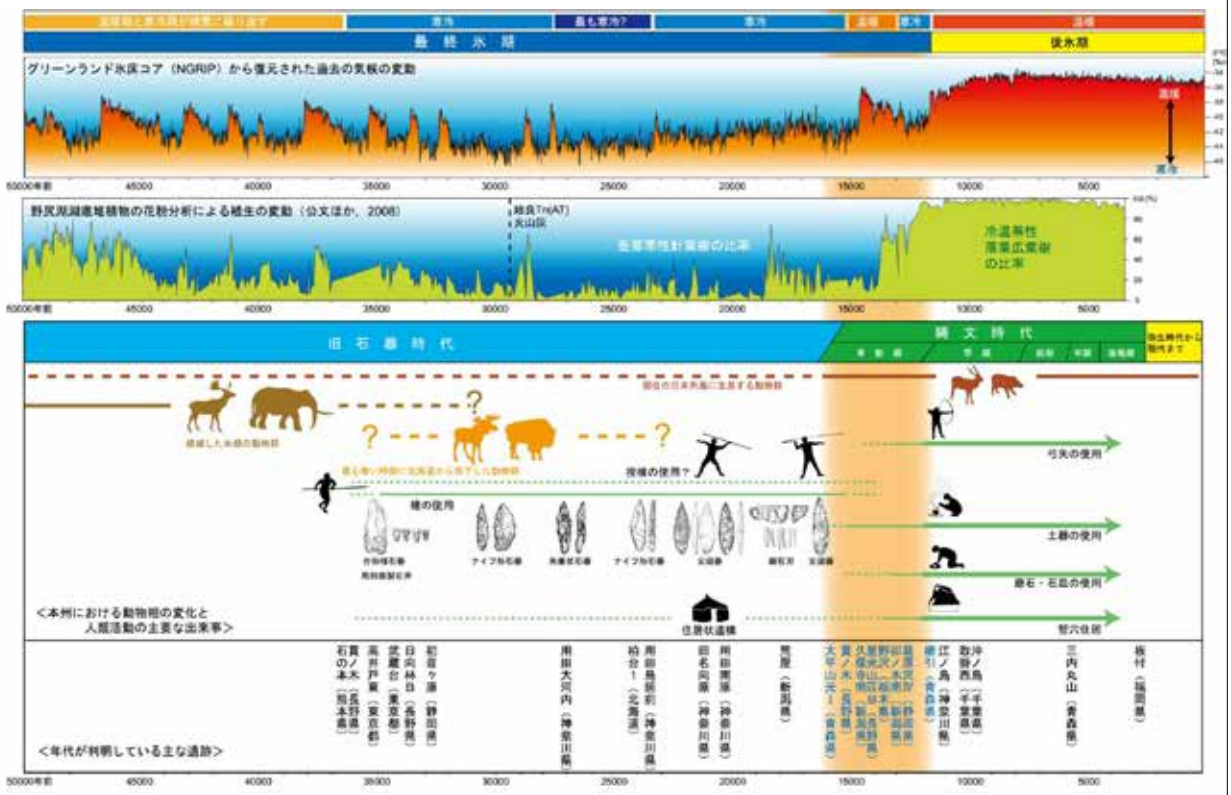


図４　草創期・早期土器付着炭化物に海洋起源物質が検出された点数（個体）

小林謙一2018「縄紋時代草創期・早期土器付着物の同位体比の検討」『紀要』史学第63号,中央大学文学部,

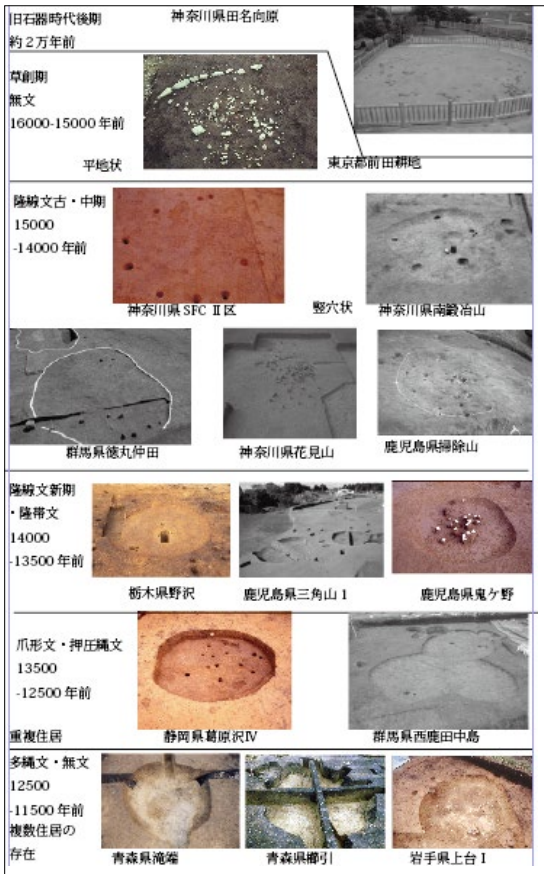
レジメ19

3－3

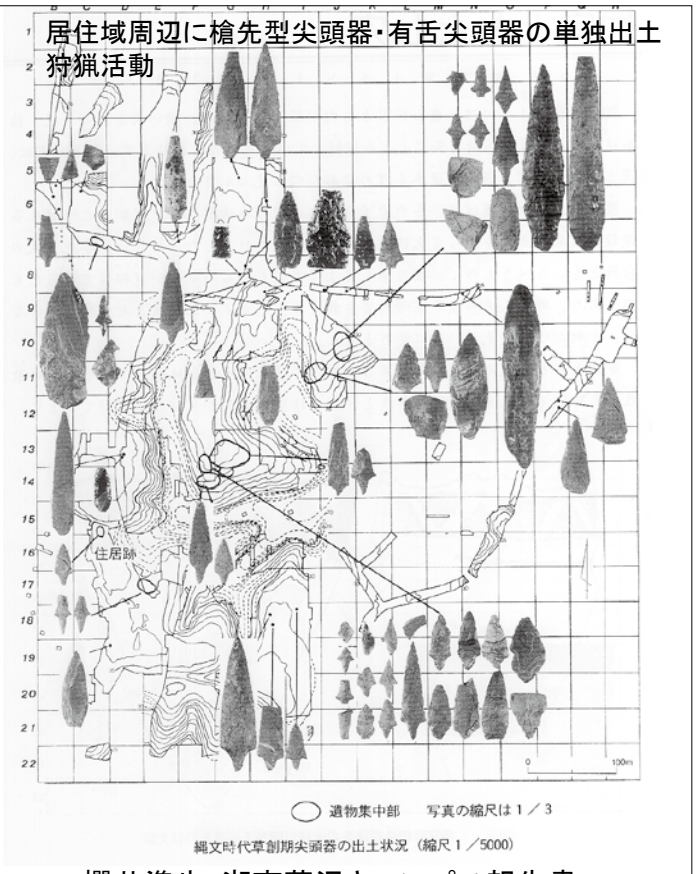


工藤雄一郎2009「縄文はいつから！？」図録（小林・工藤編2011）

レジメ20



旧石器から縄文草創期の居住施設（住居）の変遷（小林2011）
小林編「縄文はいつから！？」図録（2009）



櫻井準也・湘南藤沢キャンパス報告書1993
レジメ21

• まとめ（初期定住）

- 日本列島においても旧石器時代後期に上部構造は不明ながら簡便なテントのような居住施設が作られ、縄紋草創期無紋土器段階・隆線文土器段階に単独の居住施設は存在する。押圧縄文土器段階や多縄紋土器段階はより竪穴化した住居が増化しムラを形成する。
- 古い段階には掘込みが乏しく平地住居的な構造なのに対し、13000年前～11600年前頃のヤンガードリヤス小氷期にあたる草創期後半には竪穴化する。寒冷化に応じた住居構造の変化と考える。
- 竪穴住居により定住化が促進すると同時に土器の保有量も増加し、サケマスや植物質食糧の利用が増大。小型獣の狩猟による移動的居住も併存。

レジメ22



縄紋文化成立期の要件

土器の出現
土器の普及・装飾化

弓矢
植物性食料加工具増加

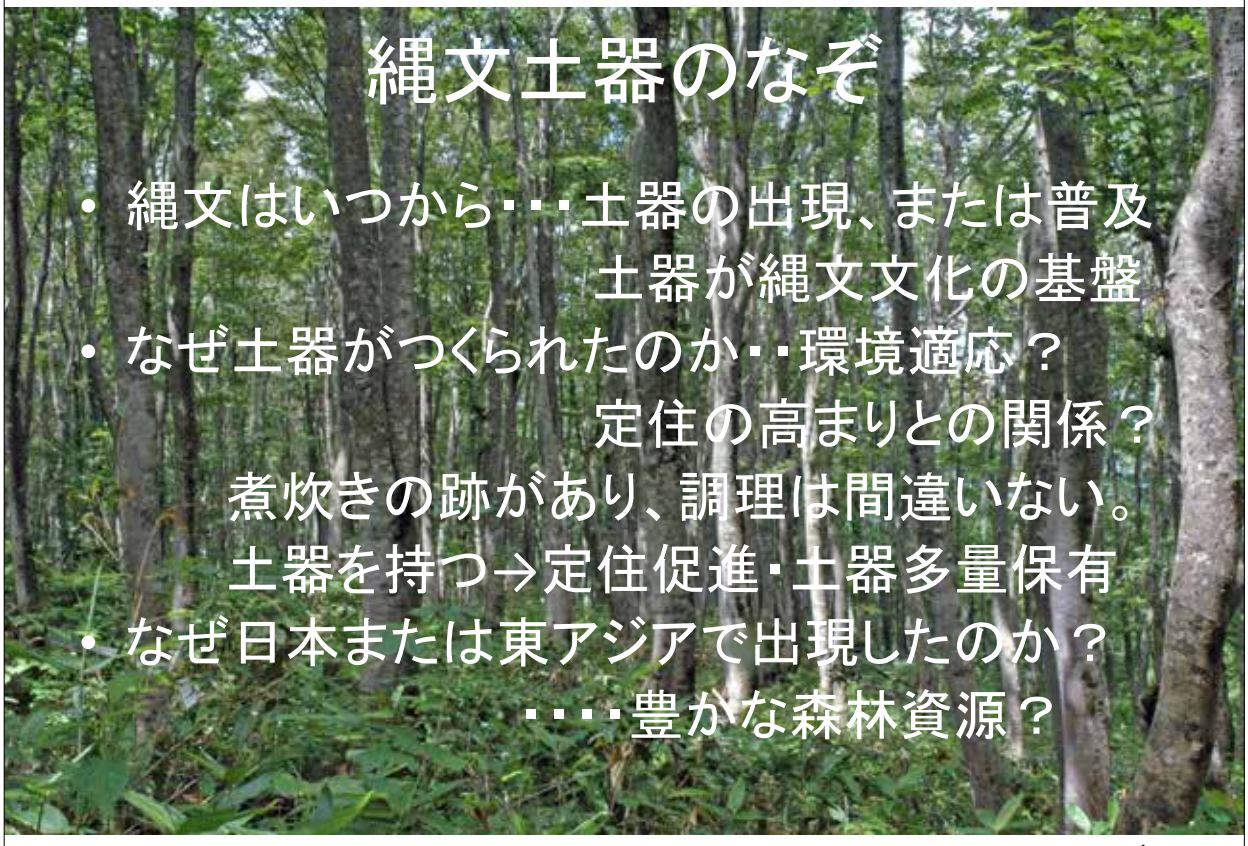
定住化
竪穴住居の成立

石偶・土偶

小林「『縄文文化のはじまり』 83p

「縄文はいつから！？」図録（小林編2009）

レジメ23



レジメ24

「木の考古学」が明らかにする 鎌倉・江戸の街並みと暮らし

昭和女子大学人間文化学部　准教授　鈴木 伸哉

はじめに　―「木の考古学」の視点と分析手法

発掘調査で出土する木製品や建物の部材は、当時の人々の生活様式やものづくりの技術、さらには暮らしを取り巻く自然環境との関係を解き明かす重要な情報源となる。とくに鎌倉や江戸といった都市における木材消費は膨大なもので、これをまかなうためには周辺植生の開発にとどまらず、遠隔地からの木材輸送や人工林の育成といった取り組みがなされてきたことが推定されるが、それを直接に物語る証拠として、これらの都市遺跡から出土する木質遺物がある。

しかしながらこうした木質遺物は石器や土器に比べて腐蝕・分解しやすく、遺跡から出土するためには高い地下水位の低湿地などの特殊な条件が必要であるが、他種の遺物にはない、樹木という「生物」の遺骸としてもつ豊富な情報が得られる利点がある。

本講演で扱う「木の考古学」とは、こうした考古資料としての木質遺物に対して考古学・自然科学的な分析手法を応用し、多角的な知見を導き出す研究アプローチを指す。主たる分析手法として、以下の３点が挙げられる。

樹種同定（解剖学的分析）

木材の組織（細胞の配列や道管の形態など）を顕微鏡下で観察し、出土木材が何の樹種（スギ、ヒノキ、サワラ、ケヤキ、カシ類など）から作られているかを同定する手法である。これにより、当時の人々がそれぞれの目的や用途（加工しやすさ、耐久性や色、信仰との関わりなど）に応じてどのように木材を選択していたか（「適材適所」の技術体系）が明らかとなる。

年輪年代学（年代決定・産地同定）

木材の年輪幅の年ごとの変動パターンを計測し、既知の標準パターンと照合することで、その木材が伐採された正確な暦年代を明らかにする技術である。近年では、樹木が生長した地域の気候情報を反映したパターン比較により、その木材がどの地域の森林で産出されたかという「産地推定」の研究も飛躍的に進展している。

花粉分析（環境復元）

遺跡内や周辺の地層や堆積物から抽出した花粉・胞子を同定・計数することで、遺跡周辺における過去の植生やその時代的変遷を復元することができる。この手法によって都市の形成や拡大に伴う森林の伐採・景観変遷を連続的なデータとして捉えることが可能となる。

以下では、これら「木の考古学」の手法を駆使して明らかとなった、中世鎌倉および近世江戸における都市生活と森林資源との関わりの歴史的展開をたどる。

１．中世都市・鎌倉の発展と木材の消費・流通

12 世紀末に源頼朝によって武家政権の拠点が置かれた鎌倉は、三方を山に囲まれ、一方が海に面した独特の地形の中に、切通（きりとおし）の掘削や平坦地の造営といった大規模な土木工事・都市開発を通じて拡大した。こうした急速な都市化は、周縁の自然環境や森林資源に大きな影響を及ぼした。

(1) 花粉分析が映し出す鎌倉の景観変遷と森林破壊

鎌倉市内の主要遺跡（永福寺跡、北条高時邸跡、若宮大路周辺など）における地層の花粉分析調査は、都市形成前後の環境変化を明瞭に示している。鎌倉時代以前の鎌倉周辺には、スギや常緑カシ類（シラカシ・アラカシなど）、暖温帯の広葉樹が繁茂する天然林が広がっていた。しかし、12 世紀末以降の都市建設や、寺社・武家屋敷の造営、燃料（薪炭）需要の増加に伴い、これらの天然林は大規模に伐採・破壊された。堆積物中のスギやカシ類の花粉の急減と、これに代わるアカマツ・クロマツなどのマツ属の花粉の増加は、二次林の拡大や人間活動による植生への干渉の大きさを示している。

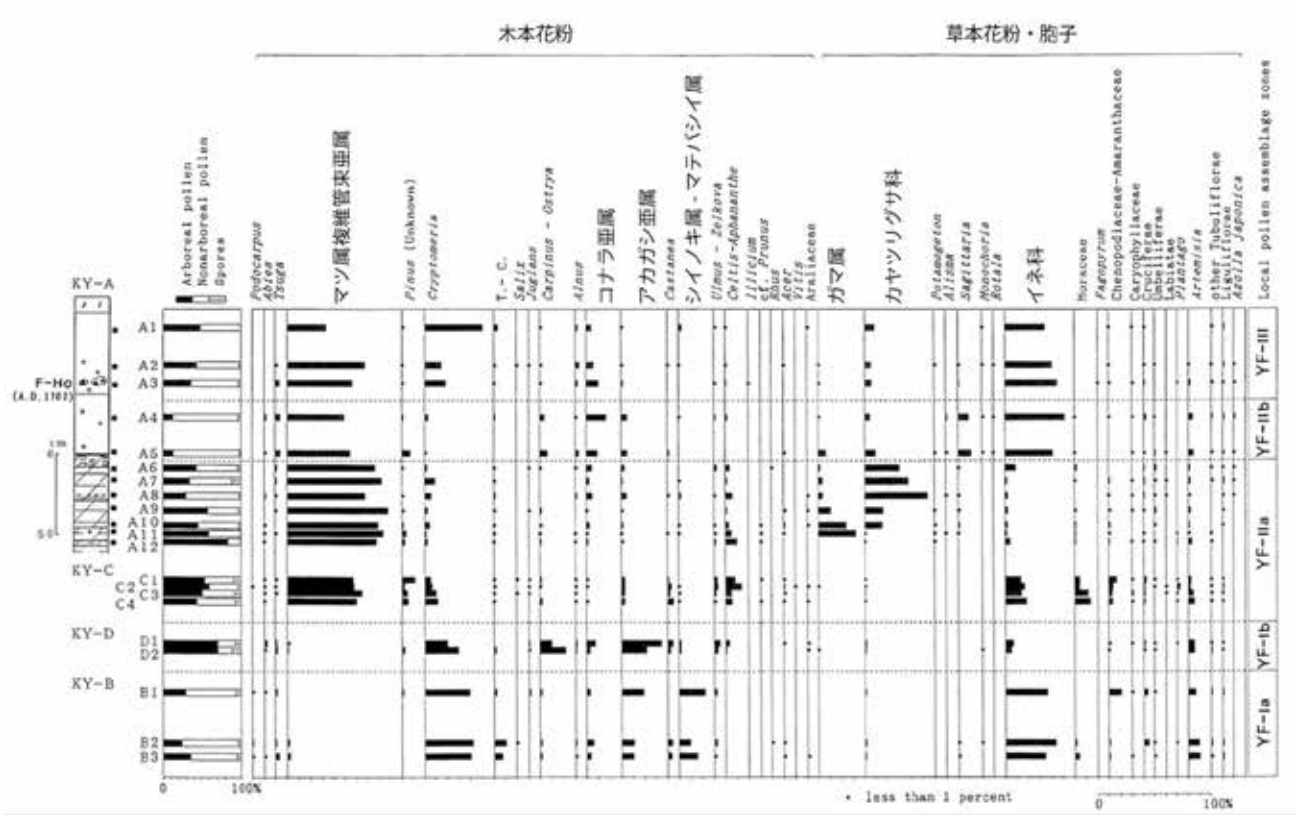


図1 永福寺跡のKY-A，KY-B，KY-C，KY-D 地点の主要花粉ダイアグラム（鈴木茂・吉川，1994 を一部改変）

(2) 市内 20 遺跡の木製品分析に見る「都市的」木材消費

鎌倉市内の武家屋敷や寺院、町屋跡など代表的な 20 遺跡から出土した約 2,000 点におよぶ出土木製品を対象とした樹種同定結果を集成することで、中世都市鎌倉に特徴的な木材利用の様相が判明した。出土した木製品全体の約 86%が、スギ・ヒノキ・ケヤキの３樹種によって占められていた。前述のように、都市化に伴い鎌倉周辺の自生植物相からはスギが急速に消失していたため、これら大量に消費されたスギ・ヒノキなどの針葉樹材や高品質なケヤキ材の多くは、鎌倉の近郊から供給されたのではなく、伊豆半島、相模国内陸部、さらには房総半島といった周辺地域からの海上・水上交通ネットワークを介して移入されたものと推定される。

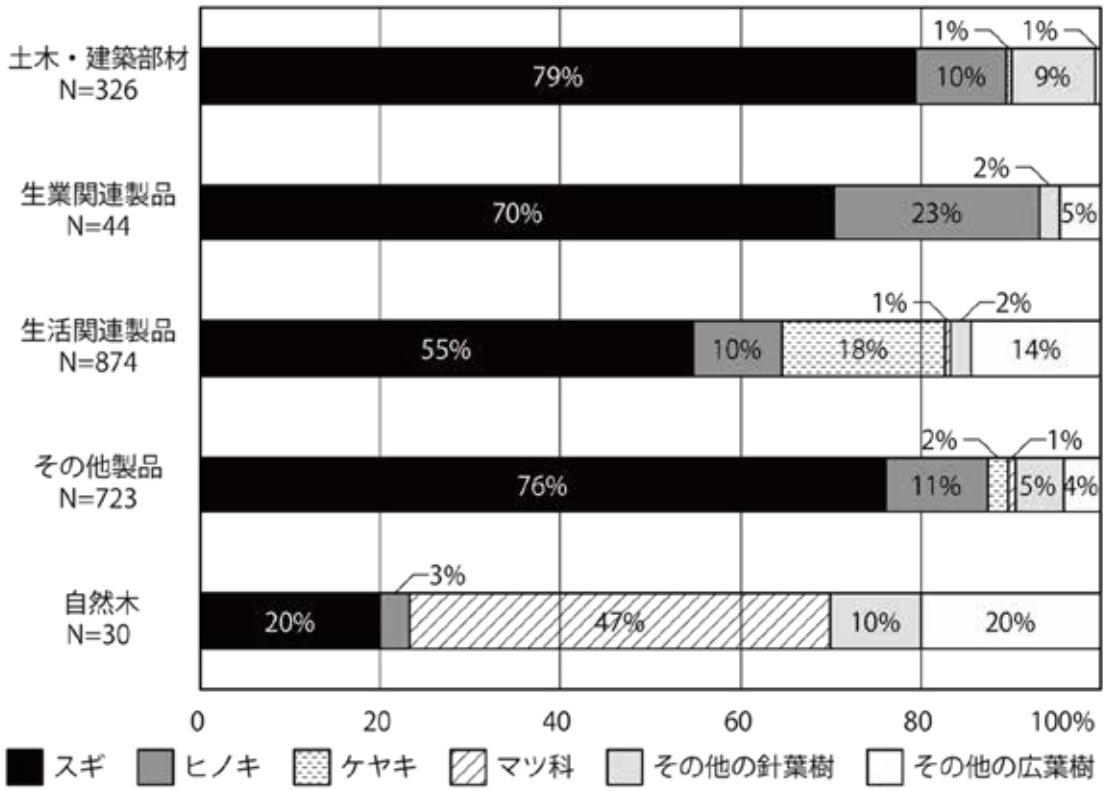


図2 鎌倉市内の遺跡から出土した木製品の分類別樹種組成（鈴木･鈴木，2015）

(3) 器種と用材の組み合わせ（適材適所の木工技術）

鎌倉の人々は、多様な木製品を作るにあたり、それぞれの用途や特性（硬度、耐水性、加工の容易さ、美観など）に合わせた適材選択を行っていた。

建築用材には通直で耐久性に優れるスギ・ヒノキが主体となり、基礎材や柱・板材に多用された。一方、挽物の漆器や曲物といった容器類では、挽物（漆器の木地）にはケヤキやシオジ、トチノキといった広葉樹材が、曲物には薄く加工しやすく曲げに強いスギ材やヒノキ材が選定された。鍬や鋤などの農具には、アカガシ類を中心とする密度の高い硬材の常緑カシ類が専用材として選択された。櫛には緻密な構造を持つイスノキが多く用いられた。イスノキは主に九州や西南日本に産する樹種であり、こうした小物品の流通には、平泉や京都など他の中世都市と共通する遠方からの交易ルート

が存在したことを示唆している。

鎌倉における木材利用の様相は、近世江戸のような全国規模で統合された木材供給市場の段階には至っていないものの、都市を支える広域的な近隣・中距離の木材流通システムと、用途に合わせた緻密な用材選択が確立されていたことを示している。

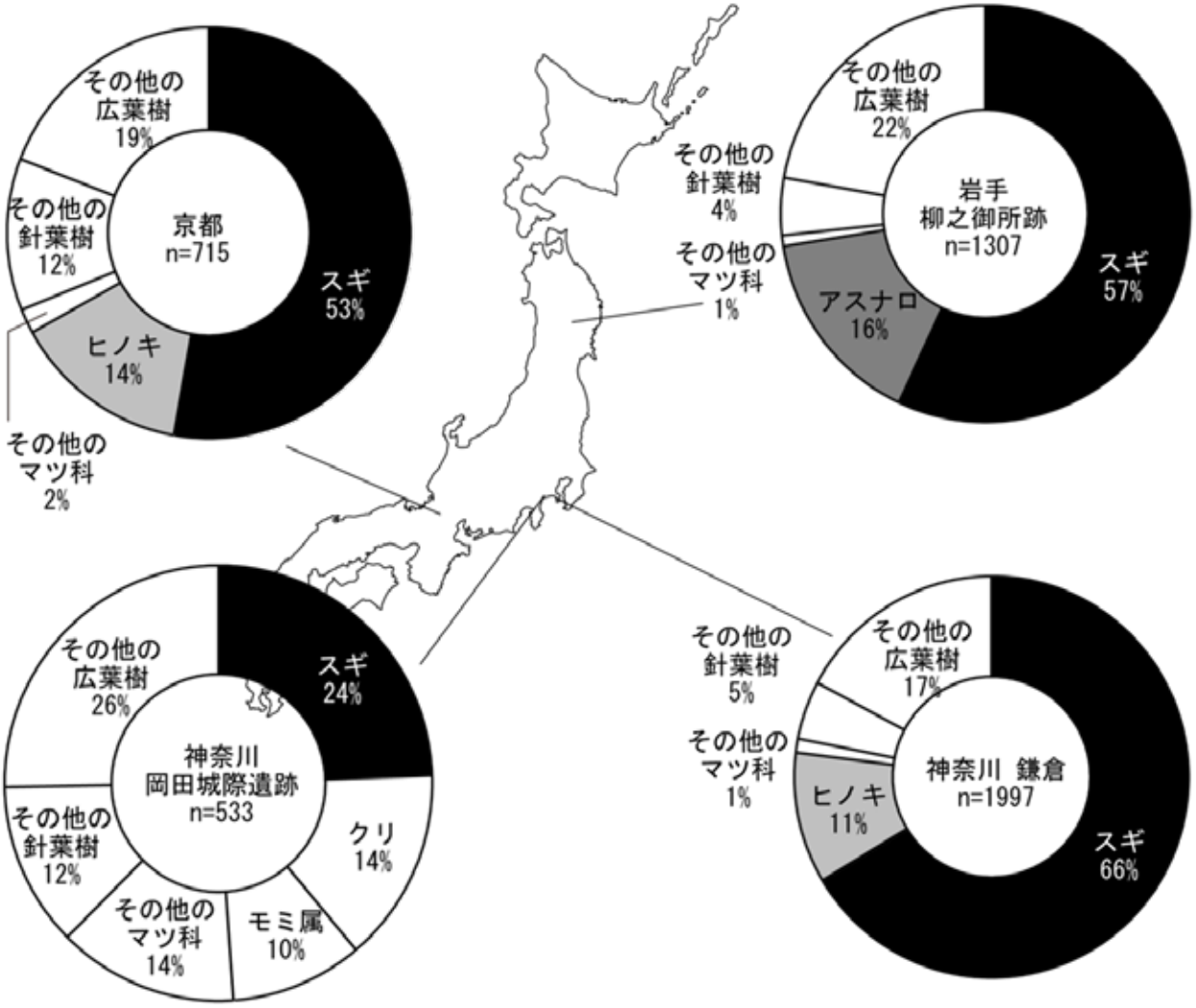


図3 中世の日本列島各地における用材傾向（鈴木･鈴木，2015）

２．近世都市・江戸の木材消費と森林資源利用の構造的変遷

17 世紀初頭､江戸幕府の開府に伴い､江戸は 100 万人の人口を抱える巨大都市へと急成長を遂げた。天下普請による江戸城の増改築や、武家屋敷や町屋の建設、さらに度重なる大火からの復興需要は、日本列島の森林環境と木材流通体系に前例のない画期的な変化をもたらした。

(1) 17 世紀の都市建設ラッシュと奥山の天然林の乱伐

江戸時代初期の爆発的な木材需要を満たすため、幕府や諸藩は木曽や飛騨などの天然林から、樹齢数百年に達する大径の天然木（ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなど）を大量に伐採･搬出した。未発達の海運や河川輸送により、遠隔地の木材資源が江戸に集約的に供給された。

(2) 新宿区南元町遺跡の木棺用材に見る歴史的動態

江戸における木材利用の実態と年代的変遷を示す研究例が、東京都新宿区南元町遺跡（一般的都市住民の墓所）から出土した 17 世紀から 19 世紀（江戸初期～幕末）に及ぶ木棺材の分析である。この遺跡から出土した木棺の樹種および年輪幅の変化を編年的に追うことで、江戸の都市社会が直面した木材資源枯渇と、それに伴う対応策の歴史が明らかとなった。17 世紀後半～ 18 世紀初頭（江戸初期～中期）の木棺材の主流は、サワラやヒノキ、アスナロといったヒノキ科の針葉樹が占めていた。これらは年輪幅が極めて細かく詰まった大径の天然林産の木材であり、木曽や飛騨などの遠隔地から運ばれた上質な木材が、棺材という日常的な葬送具にまで潤沢に投じられていた。しかし、18 世紀に入ると状況は大きく変化する。木棺材におけるサワラやヒノキの割合は急激に低下し、代わってスギ、モミ属、アカマツなどが急増する。さらに出土したスギやモミの年輪を観察すると、年輪幅が広く、比較的若齢（数十年程度）の木材であったことがわかる。

南元町遺跡のデータが示す樹種の変遷の背景には、近世初期の乱伐により全国の天然林資源が 17 世紀半ば以降には深刻な枯渇に直面したという歴史的事実が存在する。森林の荒廃と水害の頻発を恐れた幕府や諸藩は、17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけて、領内の森林に厳しい伐採規制を実施し、天然林材の供給は大幅に制限された。これに応じる形で成長したのが、多摩川流域（青梅林業）や荒川上流（西川林業）といった江戸近郊の山村地域におけるスギ･ヒノキなどの「造林（人工林経営）」である。18 世紀以降の江戸では、育林技術によって短期間で育成された若齢のスギ材や、近郊の二次林から供給されるアカマツ・モミ属材が都市における消費の主体となった。江戸という都市の膨大な消費力が、周辺の山村地域における人為的な森林管理・造林体系の発達を促し、今日の日本の森林景観の骨格を形作る契機となったと言える。

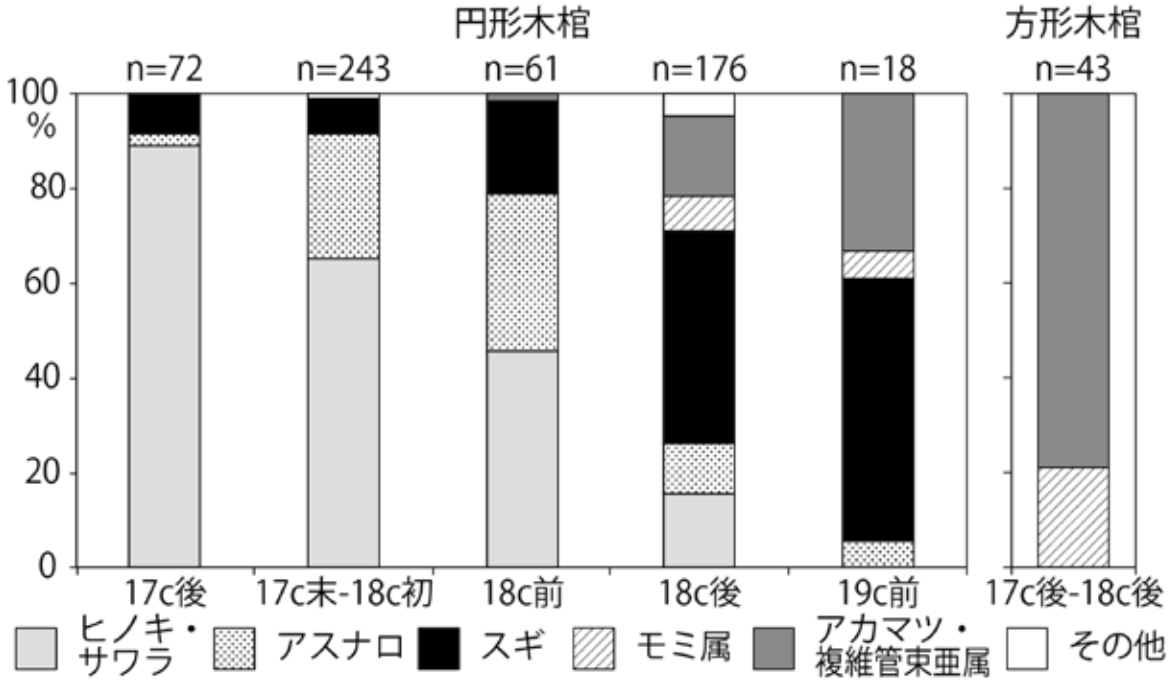


図4 南元町遺跡（崇源寺跡）から出土した円形木棺の時期別樹種組成（鈴木･能城，2006）

３．おわりに―最新科学が拓く「木の考古学」の将来展望

以上のように、発掘調査によって得られた木製品や建築部材を考古学・自然科学の手法で分析することにより、当時の木製品製作や、都市の発展プロセス、そしてその背景となる広域的な物流や森林景観の変遷までを一体として捉えることが可能となった。

とくに近年の進展が著しい木材の産地推定技術の発展によって、出土木材が「いつ伐採されたか」という年代の決定にとどまらず、どの地域の山林で育ち、どのような経路で都市へ運ばれてきたのか」という木材の流通過程を解明しつつある。「木の考古学」は、ミクロな細胞や年輪の観察を通して、かつて鎌倉や江戸に生きた人々の暮らしの様子と、日本列島における森林資源利用の歴史的ダイナミズムをこれからも追求し続けていく。

参考文献

鈴木伸哉･三浦 恵，2012「南関東(2)-神奈川県･千葉県･東京都･埼玉県(中世以降)-」『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社

鈴木伸哉･鈴木（三浦）恵，2015「鎌倉の木材利用―出土木材の樹種と年輪の観点から―」『木材の中世―利用と調達―』考古学と中世史研究 12　高志書院

Motonari Ohyama, Hitoshi Yonenobu, Yasuharu Hoshino, Shin’ya Suzuki , 2026. A two-millennia provenance-assured Chamaecyparis tree-ring chronology for central Japan. Dendrochronologia 95

かながわでコメ作りが始まった頃

法政大学文学部　教授　小倉淳一

はじめに

神奈川県は日本の考古学研究の中で重要な位置を占めてきた。特に弥生時代に関しては、先学による多くの調査研究がなされ、それによって多くの新知見を引き出してきた。今回はそれらの成果をもとに、稲作農耕が本格的に開始される時期の集落遺跡やそれに伴う墓地遺跡などから弥生時代の当地の様子を紹介し、コメ作りが始まった頃の社会について考えてみることにしよう。

１．弥生時代という時代（第１図・第４図）

弥生時代は、本格的な灌漑水稲農耕が始まった時代である。朝鮮半島から北部九州に伝わった稲作技術と文化は、列島内に広まって各地に個性ある地域文化を形成していった。北は本州島北部、南は九州島までが灌漑水稲農耕の及んだおおよその範囲であり、それに伴う文化の総体を「弥生文化」と呼んでいる。その始まりの時期については議論が続いているが、南関東地方に生業の変化が及ぶのはかなり後になってからのことであることは間違いない。列島各地にそれぞれ特色ある弥生文化が成立するにはそれなりの時間がかかるようである。

考古学的にみた弥生時代の特色は灌漑水稲農耕と金属器の登場、そしてそれらの故地である中国・朝鮮半島から到来した社会の仕組みである。物質文化を通じた検討によって、東アジアに連なる当時の集団の動向が次第に明らかになりつつある。

灌漑水稲農耕は、地形に応じて綿密に設計された水路と水田を配置し、高度な水管理を可能にした水稲農耕の形態である。戦後の考古学史の始まりを飾った静岡市登呂遺跡（日本考古学協会 1949）から発見された水田もこのタイプであり、駿河湾沿岸の低地に作られた比較的広い水田と微高地上の集落は、完成された農耕集落の姿が弥生時代後期の東海地方に存在したことを示している。そのためか、弥生時代開始期の水稲耕作は湿田・直播きといった粗放なイメージをもって語られ、列島内で稲作技術が「発展」したものと漠然と考えられていたようである。

しかし、1970 年代の後半に福岡市板付遺跡（山崎ほか 1979）の調査が行われ、従来縄文時代晩期とされていた土器を出土する層から灌漑施設を伴う整備された水田が発見されたことで、稲作出現期に対する研究上の評価は大きく変わった。水田は、伝来の当初から完成された姿を持っていたことが明らかになったのである。そのため、北部九州ではこの時期を「弥生時代早期」として縄文時

代から弥生時代に編入させている。その後、水田は前期のうちに日本海側を東進・北上して東北地方北部まで到達するが、関東地方で水田跡を伴う集落遺跡が明確になるのは中期中葉からである。

金属器については、青銅器と鉄器が前期末～中期初頭にまでには日本列島に導入されることが知られており、青銅器は間もなく列島内での生産が開始される。武器形青銅器や銅鐸など弥生文化に特有の青銅祭器が残されるのはこのためであり、生産遺跡からは鋳型も出土している。なお、製鉄は古墳時代後期にならなければ始まらず、それまでは製品や地金を輸入する状態が続く。金属器の窓口となったのもやはり北部九州であり、鉄器が関東地方に到達するのは弥生時代中期である。中期後葉に南関東一円に広がっていき､後期になるとそれまで主流であった石器が衰退していく。一方、青銅器は関東地方において出土例が少ない。

そして東アジアの稲作農耕集落の形として、当時の社会のあり方を検討できるのが環濠集落である。集落域の周囲に溝を掘りめぐらせるのが一般的であり、北部九州の早期の集落に既に登場し、稲作情報と一体となった「弥生のムラ」と捉えることができる。巨大な環濠集落は北部九州地方から東海地方に至るまで、地方の中心として機能するものとみられる。また、強固な防衛施設としての環濠が存在する一方で、伝来当初から形骸化した環濠もみられ、その姿は多様である。関東地方では中期後葉から後期にかけて盛行する。もちろん溝を持たない集落も多い。当時の集落内部を検討し、集落相互の関係を考えることで、社会の内実や展開過程に迫っていくことができるのである。

２．かながわにおける弥生時代の始まり

神奈川県域に弥生文化の波が到来するのは弥生時代前期となる。この時期には水田を伴う本格的な農耕集落遺跡が存在するわけではないが、土器のあり方は従来の縄文土器から変化し、東海系の条痕文土器、東北系の沈線文土器の影響を受けたものがみられるようになり、大きな動きが生じてくる（谷口編 2022)。秦野市平沢同明遺跡（戸田・佐々木・玉川編 2010）からは西日本弥生時代前期の遠賀川式土器の影響を強く受けた土器がみられるなど、列島各地の文化要素が複雑に折り重なっていることが理解できる。遺跡立地も小河川に面した狭い湿地を望む場所に、比較的小規模な遺跡が残されることが多いようで、大井町中屋敷遺跡（昭和女子大学人間文化学部 2008）からは前期後葉に属するいくつかの土坑と土器破片やイネを含む植物遺体が発見されている（第２図・第３図)。こうした栽培植物の痕跡は土器の表面に残される種子圧痕としても確認することができ、弥生時代の生活環境に穀類が存在していたことを知ることができる。

こうした姿から、当時の小規模な集団が水田開発を始めていたと直ちに断定できるものではないが、コメをはじめとする穀物を知っている人々が神奈川県域にいたことは間違いないだろう。このような状況は中期前葉まで続くものとみられる（第６図)。

３．本格的なコメ作りが始まった頃

本格的なコメ作りの始まりがわかるのは、弥生時代中期中葉の小田原市中里遺跡（呉地ほか 1997,

戸田･河合2015)の姿からである。酒匂川下流域の低位段丘上に、突如として大規模な遺跡が出現する。集落域・墓域・生産域を備える弥生のムラと考えられ、関東地方において傑出した内容を有している（第５図)。

この遺跡においては、旧河道に沿って営まれた集落域とみられる第Ⅰ地点から102棟の竪穴住居跡、73棟の掘立柱建物跡、６基の井戸跡のほか、多数の土器・石器等を検出しており、近畿地方の環濠集落にみられるような独立した棟持柱をもつ掘立柱建物が８棟存在する。倉庫としての機能をもっていた可能性がある。第Ⅱ地点は生産域と考えられ、水田を仕切る畦を補強するための杭列などを検出している。第Ⅲ地点からは集落に伴う方形周溝墓群が46基発見された。この遺跡の調査範囲は限られているため、竪穴住居数で200棟を越える規模の集落となる可能性がある。

コメ作りに関わる資料としては、炭化米や稲籾圧痕土器のほか、木製鍬、石製斧や斧柄、石鍬とみられる打製石斧、石庖丁の可能性のあるスクレイパーなどが出土している。

この遺跡において特徴的なのは、外来系の土器の存在である（菊池2015)。中でも播磨地域など東部瀬戸内系統の土器などが注目され、それらは生活に必要な用具として持ち込まれたもの、あるいは東部瀬戸内の人々が中里集落で製作したものとみられている(長友2022)。遺構出土土器の3.7%を占めており、これらは全体から見れば少数であるが、人間集団の移動をともなって持ち込まれたか、同遺跡内で製作された事例として重要である。そのほかに、伊勢湾沿岸、中部高地、北陸、北関東、南東北など各地の土器、サヌカイト製の打製石剣、神津島産の黒曜石も出土し、交流と往来の痕跡であると考えられる。初期の農耕集団が神奈川県域に本格的なコメ作りを始める際、それは遠隔地からもたらされる技術や知識にも頼りながら進められたことがわかる。

４．環濠集落群の形成と展開

弥生時代中期後葉になると、神奈川県域には多数の弥生集落が営まれる。横浜市三殿台遺跡（和島ほか1965）は東京湾を一望できる高所の遺跡として古くから著名であり、三浦市赤坂遺跡（赤坂遺跡調査団1977)も三浦半島の拠点的な集落としてよく知られてきた。1970年代以降には港北ニュータウン遺跡群の発掘調査等によって、横浜市域北部の集落群の存在が注目されるようになった。この時期には中期後葉の土器である宮ノ台式土器の検討も進み、折本西原遺跡の調査がひとつの画期となった（石井・倉澤ほか1980，岡田ほか1988)。その後、安藤広道により東海地方の櫛描文系土器との関連を含めた整理がなされ、下末吉台地を中心とした時間軸としてSi Ⅰ期からⅤ期までの時期が設定されている（安藤1990)。

この中のSiⅢ期に、神奈川県域に環濠集落遺跡が登場する。港北ニュータウン遺跡群の調査では、大塚・歳勝土遺跡において列島内で初めて環濠集落全体とその墓地を発見した。大塚遺跡はのべ115棟の竪穴住居跡、10棟の高床倉庫を擁する環濠集落としてよく知られ（武井編1991，岡本ほか1994)、そこから80ｍほど離れて営まれる歳勝土遺跡は25基の方形周溝墓で構成される墓地遺跡である（坂上・坂本編1975)。鶴見川水系の早渕川に臨む台地上に立地する大塚遺跡は地形に沿っ

て竪穴住居跡群を取り囲む環濠を設けている（第７図）。環濠の規模は長軸約 200 m、短軸約 130 m を測り、ある程度埋没した後に掘り直しを行っている。集落の時期は宮ノ台式期の Si Ⅲ期とされており、重複する竪穴住居跡が複数存在することから、集落内部には数棟の竪穴住居を単位とし、高床倉庫を共有する小集団が並存していたとみられている。また、歳勝土遺跡の方形周溝墓群は大塚遺跡の集落に対応する集団墓地であり、中心主体部のほかに周溝内にも埋葬があったとされることから、血縁者などを同一の墓に葬ったものなどと解釈されている。

その後ニュータウン遺跡群内で調査された綱崎山遺跡（武井 2004）や権田原遺跡（浪形ほか 2017）などは大塚･歳勝土遺跡に遅れて成立し、早渕川流域の集落展開の次段階に位置づけられよう。特に権田原遺跡は大塚遺跡よりも一回り規模が大きく、環濠内北端には一辺 20 m以上となる大型の方形周溝墓が営まれるなど、大塚遺跡の存続中から計画的に設営を進められた環濠集落とも考えられる（小倉 2019)。こうした環濠集落と、周囲に存在する環濠を持たない比較的規模の小さな集落の時期をあわせて考えていくと、環濠集落の登場時期から中期末にかけて、早渕川流域の農耕社会が比較的順調に発展していったという見通し（安藤 1991・2013）も立てられよう（第８図)。

神奈川県域を含む南関東地方全体で環濠の形成と消長についてまとめてみると、Si Ⅲ期に並行する時期に形成が始まり、継続期間に長短はあるものの、多くの遺跡は Si Ⅴ期のうちに集落としての機能を終えており、後期を迎えると一旦遺跡の数は減少するようである。

５．石器と金属器

弥生時代の稲作情報として大陸系磨製石斧類（太形蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧）が伝来し、神奈川県内各地の集落遺跡からもそれらの出土をみている。木材の伐採・加工用に稲作農耕民が保持していた道具であるから、農地の開発を進め、木製農具などの製作を行うためのものであったに違いない。時期が下るにつれて石器が鉄器に置き換わることとなるが、関東地方への鉄器供給量は必ずしも潤沢というわけにはいかず、中期段階では石器の利用が主体である。

関東地方では在地に産出する石材を用いた石斧の製作が考えられるが、良質な石材で作られた石斧が他地域からもたらされることもわかっている。中でも榎田型磨製石斧と呼ばれる信州産の伐採斧が著名であり、石斧の流通圏が形成されているのである（馬場 2001)。遠隔地とのもののやりとりは中期後半に活発に行われており、中期後半には神奈川県域でも鉄器が登場する。横浜市域で目立つ例では権田原遺跡および観福寺北遺跡群関耕地遺跡（田村ほか 1997）においてともに板状鉄斧が出土しているが、実は両遺跡ともに榎田型磨製石斧も出土している（第 10 図)。石斧の流通ルートに重なる形で鉄斧の流通が広がってきたとみてよい。その他県域で注目されるのは、秦野市砂田台遺跡（宍戸ほか 1989）の鉄製工具（板状鉄斧、鉄鑿、鉇）などであり、この時期には日本海側から信州を経由するルート、太平洋側を伝うルートの両方から鉄器が伝来しているものと考えられる（林 2022)。

なお、大型化した青銅祭器は関東地方で発見されておらず、銅製品は後期にみられるようになる。

６．かながわの弥生時代後期

弥生時代後期初頭に減少した集落遺跡はその後再び増加に転じ、比較的小規模な環濠集落や環濠をもたない集落が多く営まれるようになる。神奈川県域各地には、東海地方各地の系譜を引く土器やその影響を受けた土器が分布することが知られており、河川流域毎に個性的な様子を示す。また、横浜市域の内陸部を中心に中部高地系統の櫛描文を持つ朝光寺原式土器が成立するなど、中期以来の交流経路を介した人間集団の動きをみることができる。

相模川の支流にあたる目久尻川流域に属する綾瀬市神崎遺跡（比留川ほか 1992）はおよそ 4,800㎡の範囲を環濠が囲う後期の集落で、出土土器は東三河から西遠江にかけての形態的特徴をもつ土器が 95％を占める（第 12 図）。東海地方から移住した集団の存在を想定することが可能である。これほどの比率ではないとしても、県域の諸遺跡では外来的な土器の存在が多く認められる。

青銅製品は県域では銅釧、指輪形銅製品などが後期になってから出土し、小銅鐸もみられるようになる。鉄製品は農工具だけでなく、漁具や装身具などにも広がる。横浜市 E5 遺跡（武井編 2001）のように朝光寺原式土器を出土する遺跡の方形周溝墓に鉄剣や鉄釧が副葬されている例も注目される（第 11 図）。

このように地域を越えた交流が頻繁になる動向は県域にとどまらず、南関東地方全体に共通する傾向といえるだろう。

おわりに

灌漑稲作農耕によって大きな転換期を迎えた神奈川県域では、各地からの影響を受けた地域的な弥生文化が育まれていった。農耕生活の安定と発展のために人々はまとまり、新たな耕地の開発や各地との交流を続けていったものとみられる。神奈川県域の弥生時代社会はこうした時期を経て地域社会として成熟していき、やがて訪れる古墳時代へとあゆみを進めていくこととなるのである。

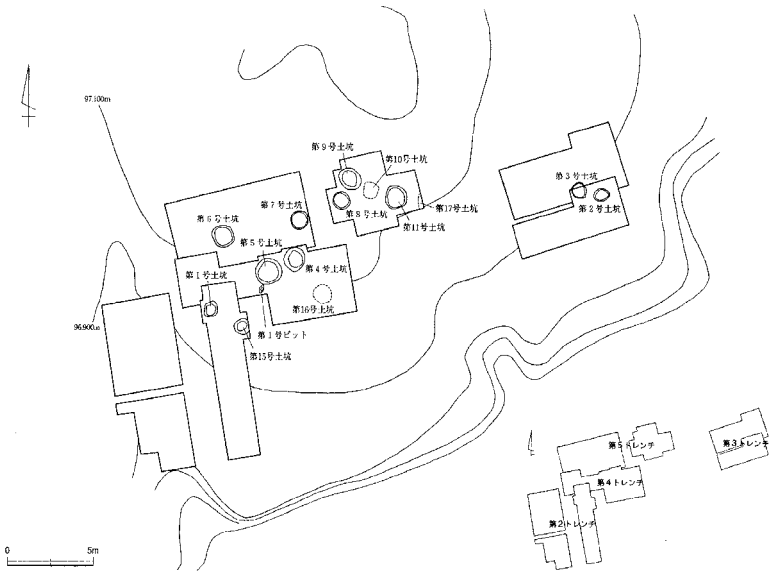
参考文献

赤坂遺跡調査団 1977『三浦市赤坂遺跡』三浦市教育委員会
安藤広道 1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」（上）･（下）『古代文化』第 42 巻第６・７号
安藤広道 1991「弥生時代集落群の動態」『調査研究集録』第８冊　横浜市埋蔵文化財センター
安藤広道 2013「弥生時代集落遺跡の分析方法をめぐる一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第 17 号　横浜市歴史博物館
石井 寛・倉沢和子ほか 1980『折本西原遺跡　横浜市都市計画道路新横浜元石川線折本地区埋蔵文化財発掘調査報告書』横浜市埋蔵文化財調査委員会
岡田威夫ほか 1988『折本西原遺跡』1　折本西原遺跡調査団
岡本 勇ほか 1994『大塚遺跡Ⅱ』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ＸＶ　財団法人横浜市ふるさと歴史財団
小倉淳一 2019「早渕川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期―権田原遺跡の検討を中心して―」『法政考古学』第 45 集
菊池有希子 2015「中里遺跡出土の畿内系土器について」『中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
呉地英夫ほか 1997『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書 61　小田原市教育委員会

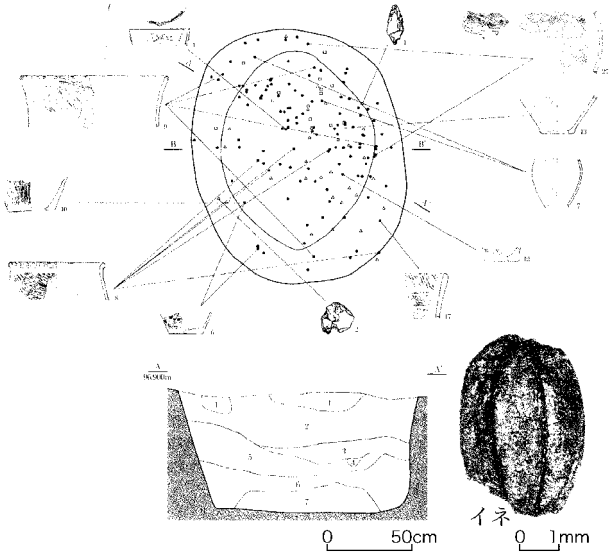
小林秀満ほか 1999『神奈川県高座郡寒川町　倉見才戸遺跡発掘調査報告書−第３次調査−』倉見才戸遺跡発掘調査団
坂上克弘・坂本 彰編 1975『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅴ　横浜市埋蔵文化財調査委員会
宍戸信吾ほか 1989『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 20　神奈川県立埋蔵文化財センター
設楽博己 2014「農耕文化複合と弥生文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集
昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 中屋敷遺跡発掘調査団 2008『神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡発掘調査報告書』六一書房
高橋健ほか 2017『横浜に稲作がやってきた!?』横浜市歴史博物館
武井則道 2004『綱崎山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 36　財団法人横浜市ふるさと歴史財団
武井則道編 1991『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ　横浜市埋蔵文化財センター
武井則道編 2001『E5 遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 27　横浜市教育委員会
谷口肇編 2022『日本史のなかの神奈川県』山川出版社
田村良照ほか 1997『横浜市観福寺北遺跡群　関耕地遺跡発掘調査報告書』観福寺北遺跡発掘調査団
戸田哲也・河合英夫ほか 2015『中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
戸田哲也・佐々木竜郎・玉川久子編 2010『神奈川県秦野市平沢同明遺跡発掘調査報告書』秦野市教育委員会・玉川文化財研究所
長友朋子 2022「土器の移動からみた近畿地方と中里遺跡」『南関東の弥生文化　東アジアとの交流と農耕化』吉川弘文館
浪形早季子ほか 2017『権田原遺跡Ⅱ　弥生時代中期編　附：新吉田十三塚遺跡弥生時代中期編　矢東遺跡弥生時代中期編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 49　公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
日本考古学協会 1949『登呂』
馬場伸一郎 2001「南関東弥生中期の地域社会―石器石材の流通と石器製作技術を中心に―」（上）･（下）『古代文化』第 53 巻第５・６号
林大智 2022「北陸地方からみた関東地方の鉄器普及」『南関東の弥生文化　東アジアとの交流と農耕化』吉川弘文館
廣田和穂ほか 2012『柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 100 集　一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
比留川聡ほか 1992『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告２　綾瀬市教育委員会・綾瀬市史調査会・神崎遺跡発掘調査団
山崎純男ほか 1979『板付遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 49 集　福岡市教育委員会
和島誠一ほか 1965『三殿台　横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告』横浜市教育委員会

年表				
相対年代			土器型式・様式	
時代	時期		横浜・神奈川	埼玉・他
弥生時代	前期 Ⅰ		中屋敷 堂山	
	Ⅱ	前葉	東海系 条痕文土器 等	
	中期 Ⅲ	中葉	平沢 遊ヶ崎 中里	出流原 池上
	Ⅳ	後葉	子ノ神 下末吉 1 2 3 4 5 宮ノ台	北島
	後期 Ⅴ	初頭 前葉	北川谷 久ヶ原 1 2	岩鼻
		中葉 後葉	（弥生町） 3 4	吉ヶ谷
古墳時代	終末期・早期 Ⅵ	古段階 新段階	（前野町） 5	吉ヶ谷系
	前期	前葉 中葉 後葉	6 五領	五領

第１図　弥生時代の相対年代と
南関東の弥生土器型式・様式
（高橋ほか 2017）



第２図　中屋敷遺跡北調査Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図
（昭和女子大学人間文化学部 2008）

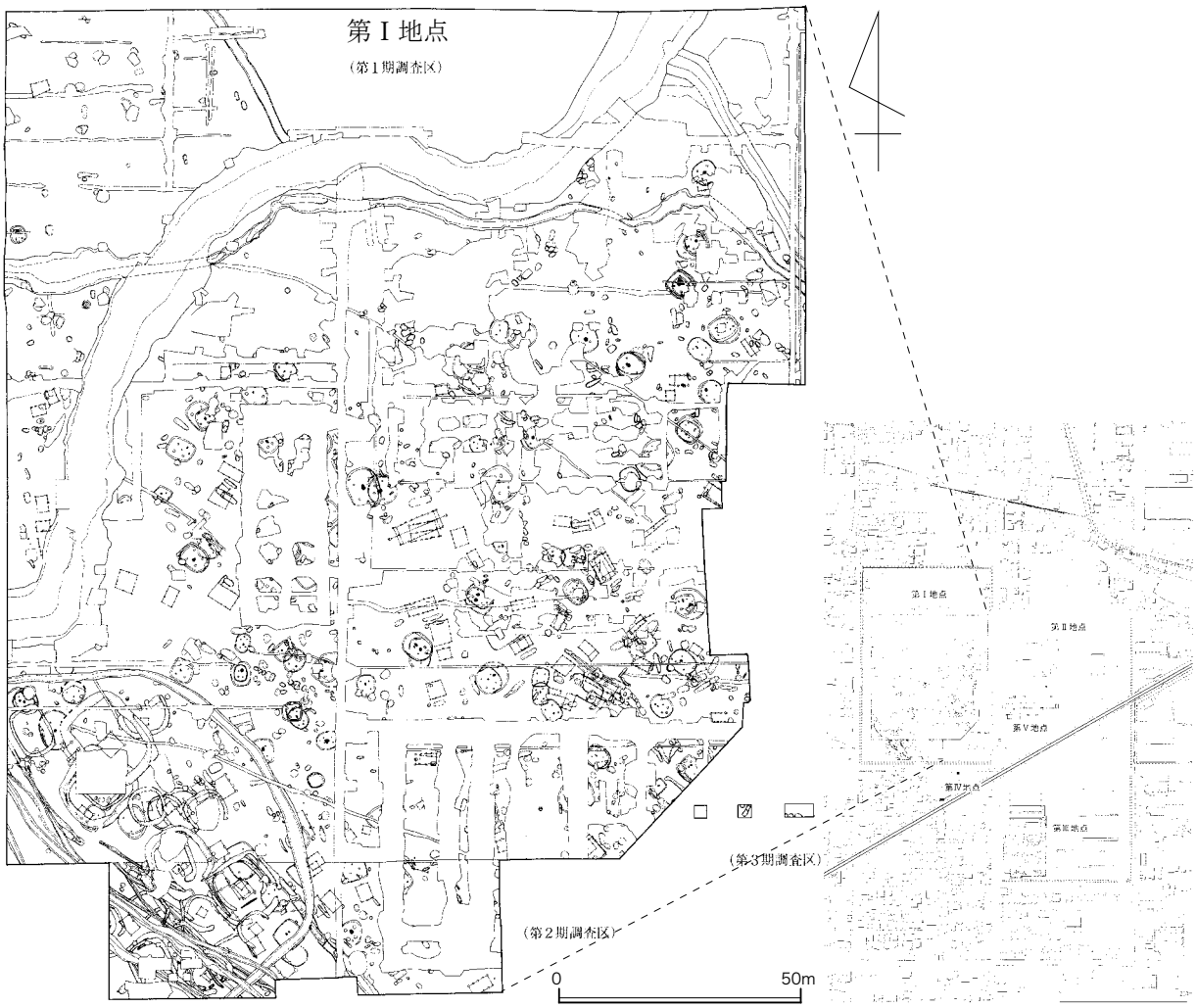


第３図　中屋敷遺跡第９号土坑と出土イネ炭化胚乳
（昭和女子大学人間文化学部 2008 より作成）

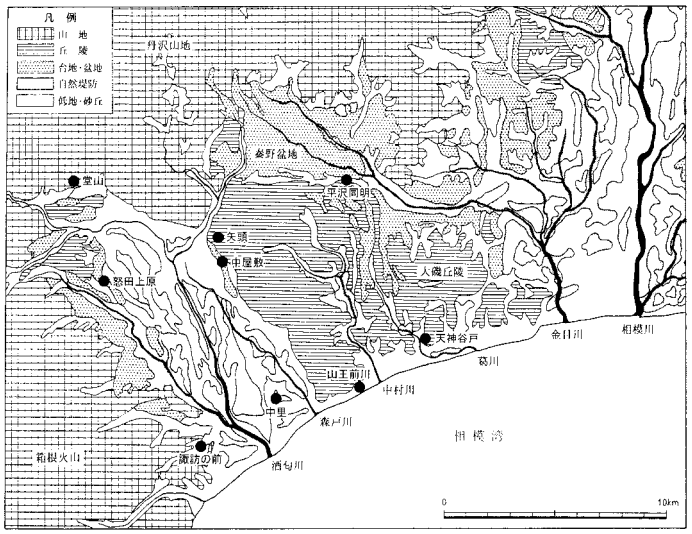
土器編年（網掛けは弥生時代）

北部九州	中国	近畿		東海		中部高地		南関東	北東北
長行Ⅰ式	前池式	滋賀里Ⅳ式	突	西之山式		佐野Ⅱａ式		安行3d式・前浦式	大洞C₂式（古）
夜臼Ⅰ式	津島岡大式	口酒井式	帯	馬見塚C地点式		佐野Ⅱｂ式			大洞C₂式（新）
夜臼Ⅱａ式	沢田式	船橋式	縄文時代と弥生時代の区切り			女鳥羽川式	浮線文土器	桂台式	大洞A₁式
板付Ⅰ式・夜臼Ⅱｂ式									
板付Ⅱａ式	遠賀川式（古）	遠賀川式（古）・長原式	土器	馬見塚式		離山式／氷Ⅰ式（古）		千網式／荒海１式	大洞A₂式
板付Ⅱｂ式	遠賀川式（中）	遠賀川式（中）・水走式		遠賀川式（中）・樫王式	条痕文土器	氷Ⅰ式（中）／（新）		荒海１式／２式	大洞A´式
板付Ⅱｃ式	遠賀川式（新）	遠賀川式（新）		遠賀川式（新）・水神平式		氷Ⅱ式		荒海３式／４式	砂沢式

第４図　階段状の時代の区切りによる年表
（高橋ほか 2017，原図設楽 2014）



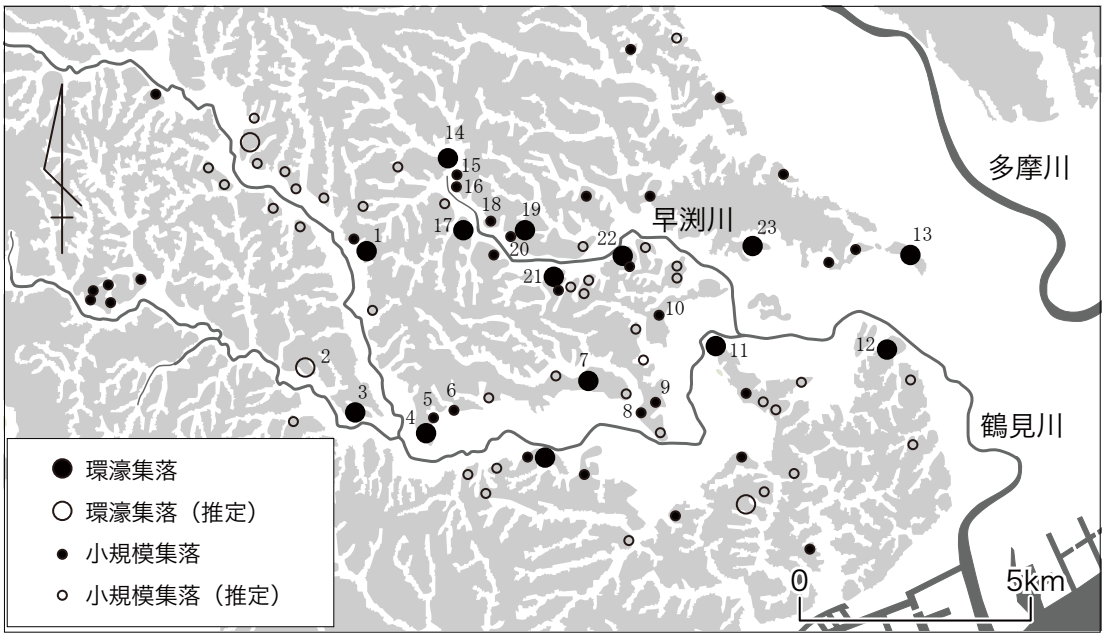
第５図　中里遺跡全体図と第Ⅰ地点拡大図（戸田・河合ほか 2015）



第６図　中里遺跡の位置と前時期遺跡の分布（戸田・河合ほか 2015）

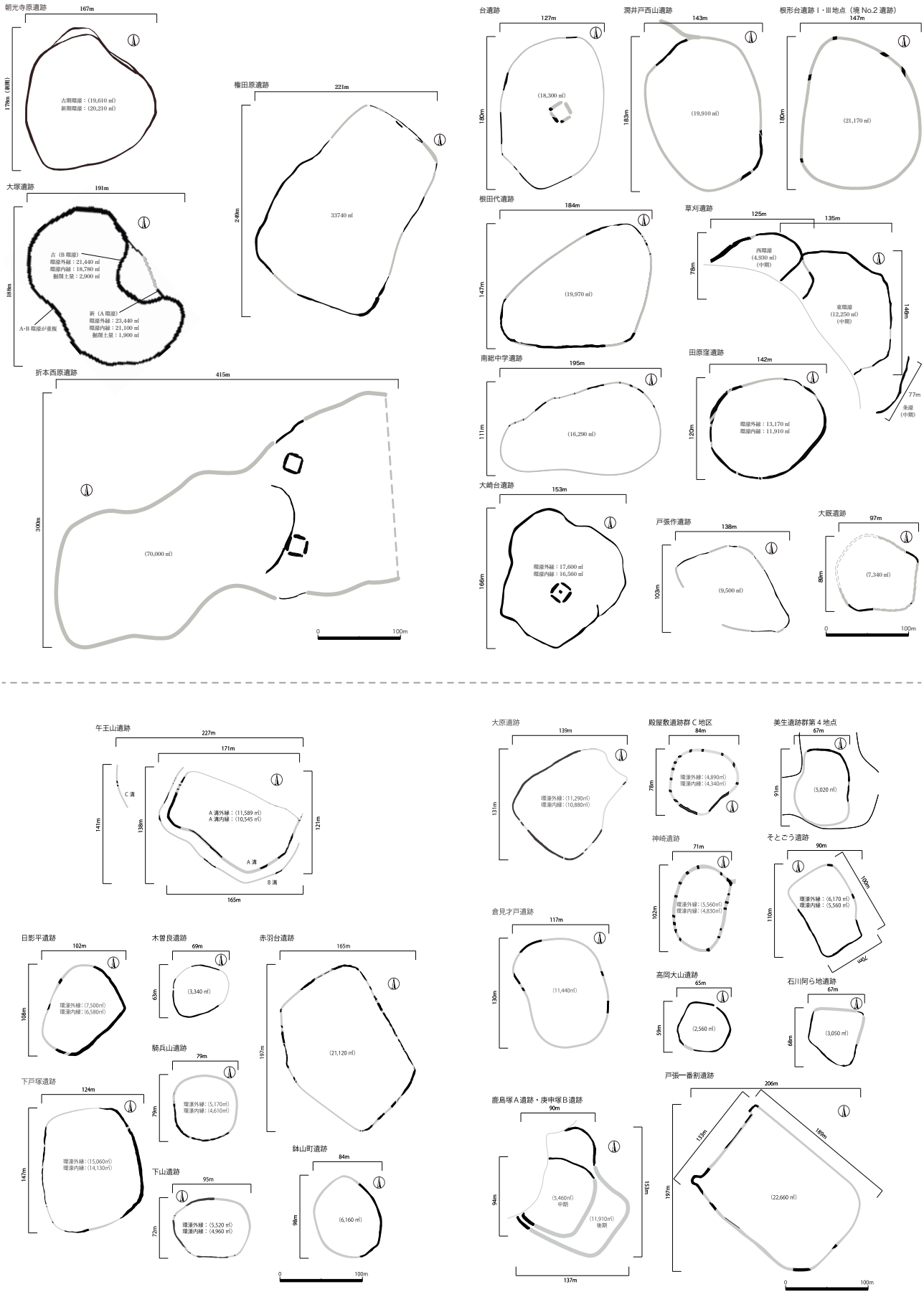


第 7 図　大塚遺跡の宮ノ台式期環濠集落（武井編 1991）



1．朝光寺原遺跡　2．藤林遺跡　3．谷津田原遺跡　4．宮原遺跡　5．清水場遺跡　6．藪根不動原遺跡
7．折本西原遺跡　8．新羽大竹遺跡　9．専念寺裏遺跡　10．宮ノ原遺跡　11．牢尻台遺跡　12．梶山北遺跡
13．南加瀬遺跡　14．観福寺北遺跡　15．老馬遺跡　16．鍛冶山遺跡　17．柚木台遺跡　18．八幡山遺跡
19．大塚遺跡　20．大棚杉山神社遺跡　21．綱崎山遺跡　22．権田原遺跡　23．森戸原遺跡

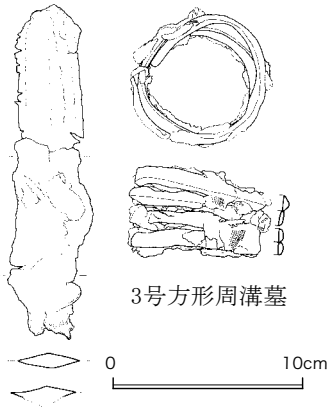
第 8 図　鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期の集落遺跡（小倉 2019）



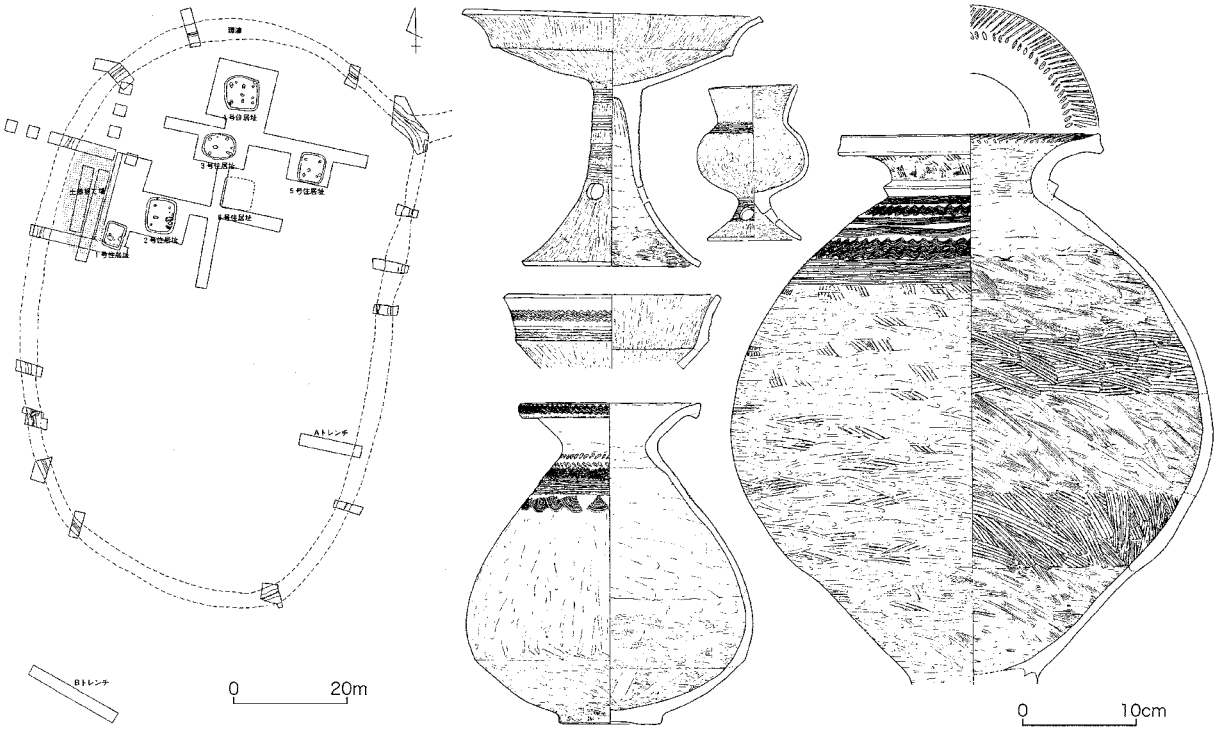
第９図　関東地方における環濠集落規模比較図（上段：中期，下段：後期～古墳時代前期，筆者作成）



第 10 図　権田原遺跡・観福寺北遺跡群（関耕地地区）出土の太形蛤刃石斧と鉄斧
（浪形ほか 2017，田村ほか 1997 より作成）



第 11 図　E5 遺跡出土の鉄剣・鉄釧（武井ほか 2001）



第 12 図　神崎遺跡の環濠と出土土器（比留川ほか 1992 より作成）

遺物から見た消費生活と近代化

－近代消費生活の実態と画期－

尚美学園大学　名誉教授　櫻井 準也

はじめに

わが国の近代における消費生活については、既に歴史学や経済学、あるいは文化人類学などの分野で言及されているが、主に発掘資料を扱う考古学もその一翼を担う存在である。考古学において近代を扱う分野は、近現代考古学と呼ばれており、近現代遺跡から発掘された考古資料は当時の消費生活の実態を我々に伝えてくれる。本講演では、消費の概念や近代特有の消費のあり方について説明したのち、具体的な発掘調査事例を紹介しながら、わが国の近代消費生活における画期について述べてみたい。

１．消費の概念と日本考古学

明治時代に西 周によって使用されるようになった「消費 consumption」という言葉には、「①使ってなくすこと。使い果たすこと。費消。②経済で、人間の欲望を満たすために財貨を消耗する行為。生産と表裏の関係にある経済現象」（『日本国語大辞典』）という意味があるが、わが国の考古学における消費は、②の後半部分のように「生産と消費」という漠然としたイメージで使用されることが多い。例えば、後期旧石器時代であれば石器の素材である石材の消費、縄文時代や弥生時代であれば獲得した食料の消費などと表現されるが、ここでの消費は「消費活動」という意味で記述されることが多いようである。

これに対し、歴史考古学では生産物の「生産→流通→消費」という一連の流れの中で様々な議論が展開される。近世になると消費集団や個人の趣味嗜好なども重要な研究視点となるが、近世陶磁器の階層による嗜好の違いなどについては指摘されるものの（長佐古 2001 など）、発掘資料を用いて個人の趣味嗜好について論じた論考は稀である。しかし、近年発掘された近世の東京都新宿区四谷一丁目遺跡では、調査区の土地の面積や価格、地主名がわかる沽券絵図や住民の名前や家族構成、出身地や職業がわかる人別書上、さらには関連する人物の記録が残されているため、それらの記録と検出遺構や出土遺物を比較検討することによって、当時の住人の暮らしだけでなく彼らの職業や趣味嗜好についても言及できる興味深い遺跡である（新宿区立新宿歴史博物館 2021）。

近代になると、②の前半部分のように消費者の欲求を満たすために財やサービス（商品）を消耗するという意味合いが強くなってくるが、その一方で近代における消費の本質的機能は意味を表示

することであり、財は人間の創造的能力の非言語的媒介物であると考えることもできる（ダグラス＆イシャーウッド 1984)。この点について近代的消費の変遷を歴史的に検討したマクラッケンは、消費財は文化的意味をおびており、その意味構造として存在する階級・地位・性別・年齢・職業などの文化カテゴリーは消費財によって実体化され、理念や価値観といった文化原理も消費財によって実体化されると指摘している（マクラッケン 1990)。同様に、ブルデューは文化に関わる有形・無形の所有物を「文化資本」と定義したうえで、文化的財の消費選択を通して社会的階級の趣味（嗜好や美的価値）が生産されることを「文化的卓越化」と表現し、これによって消費者のライフスタイルが生成されると論じている（ブルデュー 1990)。

近代における消費を扱う際には、機能消費・快楽的消費・顕示的消費・記号消費といった複数の消費概念によって説明が加えられている。このうち、機能消費は実用的な機能に価値（価格も含む）を認めて商品やサービスを購入することであり、古くから存在していた基本的な消費のあり方である。また、快楽的消費は商品を買うことや使うことに喜びや楽しさ、癒しなどを感じる消費のあり方である。顕示的消費（誇示的消費）については、自分の地位や財力を他人に見せびらかす消費であり、自尊心と金銭的見栄による有閑階級の誇示的消費について論じたヴェブレンは、家族の時間や労力を奉仕活動や慈善活動に費やす時間の非生産的消費の存在を指摘している（ヴェブレン 1961)。最後に記号消費については、ボードリヤールが意味するものと意味されるものが恣意的に結びつき､他の記号との関係で意味が決定される「記号としての消費」の存在を指摘した（ボードリヤール 1979・1980)。また、ボードリヤールは個人的消費と集合的・政治的消費を区別し、個人は広告という言説の中で価値（意味）を与えられている神話体系（モノに関する神話）を消費しているとも述べている。

さらに、こうした近代の消費概念に加えて、マクラッケンは従来議論されてこなかったモノに関する概念として、消費財の「古光沢（パティナ)」、「キュレイター的消費」、「ディドロ効果」といった概念を提示しているが（マクラッケン 1990)、これらの概念は近代以降の購買活動を理解するうえで注目されるものであり、近代における消費文化について語る際に大いに参考になる概念である。

２．近代消費生活の実態

(1) 近代消費生活の画期

日本の近代経済史における画期としてあげられるのが、開国～明治維新期、産業革命期（1880 年代後半～日清・日露戦争)、第一次世界大戦期（大戦景気)、そして戦後の高度経済成長期である。しかし、こうした日本経済の発展がそのまま日本人の生活向上に結びつき、民衆生活の近代化に直結した訳ではない。明治政府の政策が政府主導の「上からの産業化」（富永 1990）であり、文明開化を含む明治時代前期には民衆生活の向上はみられなかった。生活史の分野では日本人の生活に変化が生じたのは日清・日露戦争の頃とされているが、その背景に公共インフラの整備があったことは明らかである。

現在においても生活するにあたって最低限のインフラを表現する言葉として「電気・ガス・水道」があるが、わが国のインフラは最初から光源として電気、熱源としてガス、水源として水道があったわけではなく、明治時代以降、紆余曲折を経て現在に至っている。例えば、光源については明治時代初期までは灯油（菜種・綿実の搾り油）を用いた伝統的な灯火具である行灯や灯台、和ろうそくを用いた燭台・提灯が使用されていたが、明治 10 年代には西洋の灯火具であるランプがわが国に普及した。その後登場した電灯は、1888（明治 21）年に東京で電力供給が開始され、明治時代末～大正時代初期に急速に普及したが、1913（大正２）年の普及率は全国戸数の約１／３程度であった。次に、熱源については、昭和時代になっても竈、コンロ、七輪、火鉢などで薪や炭が使用された一方で、都市部では明治時代後期から大正時代にかけて電気が熱源として使用された。その後、1899（明治 32)年に熱用ガス(都市ガス)の利用が始まり、1930(昭和５)年頃から全国的に普及するようになった。また、戦後の 1955 年には都市ガスのように地中配管を必要としない液化石油ガス（家庭用プロパンガス:ＬＰＧ）の生産が始まり、高度経済成長期に一気に普及した。最後に、水源については、1887（明治 20）年の神奈川県新水道（横浜）が近代水道の最初であったが、全国的に普及率は低く、1916（大正５）年の給水戸数は全体の 3.6%であった。台所の蛇口をひねれば水が出るという状況は都市部に限られており、多くの家庭では井戸や共同栓などでの水汲みという重労働から解放されることはなかった。こうしたインフラ整備は近代生活を成立させる条件であったが、わが国では短期間で達成できず、結果的に都市と地方による格差を生じさせることとなった。

これに対し、近現代考古学の分野で近代の民衆生活の変化を発掘資料によって明らかにしたのが、神奈川県三浦市ヤキバの塚遺跡である（三浦の塚研究会 2003)。塚状の堆積物を層位発掘した本遺跡からは明治時代初期から戦後にかけて遺跡周辺の住人によって廃棄された遺物（生活財）が大量に出土した。各層の形成年代は、最下層の９層が明治 10 年代頃、６～８層が明治 20 ～ 30 年代頃、５層が明治 30 ～ 40 年代頃、４層が明治時代末から大正時代頃、３層が大正時代から昭和時代初期頃、２層が昭和時代初期頃、１層が戦中前後、表土層が戦中･戦後と推定される。出土した遺物（生活財）の中で「灯火具類」については、行灯などに使用される秉燭や灯明皿が大正時代頃の層まで出土し、それに代わって電灯の笠や電球、碍子などが出土している。また、ランプの部品や火屋は明治 10 年代から戦中頃にかけての層から出土しており、電気の時代になってもランプが使用・保管されていたことがわかった。これに対し「化粧道具」は、お歯黒道具である鉄漿壺や鉄漿坏、また日本髪には欠かせない油壺が明治時代末から大正時代頃の層で出土しており、この頃にはお歯黒の風習がなくなり、伝統的な化粧法が消滅したことが窺われる。なお、この時期からガラス製の化粧水瓶が出土するようになり、昭和初期には化粧クリーム瓶も出土していることから、西洋的な化粧法が定着してきたことがわかる。

このように、この地域において伝統的生活スタイルが近代的生活スタイルへと大きく変化した画期がこの地域に電気が供給されるようになった大正時代前後であることがわかったが、食生活に関しては明治時代から戦中にかけての層位から洋食器がほとんど出土していないことから、この地域



図1　港区上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡253 号遺構と出土遺物（港区教育委員会・盤古堂2006）

の家庭では戦後になるまで近世以来の伝統的な食事が中心であったことが想像できる。

（2）新中間層の消費生活

わが国では、明治時代末期から大正時代にかけて企業や公官庁に務める給与生活者を意味する「新中間層（ホワイトカラー）」が登場したが、都内で新中間層の人々の居住地の発掘調査が実施された事例として東京都港区上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡がある（港区教育委員会・盤古堂 2006）。

本遺跡では、大谷石を用いて構築された擁壁に沿って配置された遺構群から多量の近代遺物が出土している。なかでも遺物の出土量の多かった遺構が 253 号遺構であり、廃棄された近世の陶磁器・土器、近代の磁器（多量の洋食器を含む）、磁器人形、ガラス瓶（飲料瓶・調味料瓶・食品瓶・化粧瓶・薬品瓶・文具瓶）、ガラス製品（グラス・電灯傘・電球）が大量に出土している（図１）。また、本遺跡が注目されたのは、土地の登記簿などから当時の居住者が判明し、当時の居住者に関する様々な情報が収集されたことである。居住者は 1921（大正 10）年からこの地に居住していたＡ家であり、発掘調査を担当した山田仁和氏は近代遺物が廃棄された大正時代末期から戦時中のＡ家について文献調査を行い、その子孫への聞き取り調査も実施している（山田 2006）。

Ａ家の当主は東京帝大卒業後に石油会社に就職した人物で石油地質学関連の著作を多く残しており、晩年に地質学会の会長を務めた。山田氏によれば、当主は野球や学生相撲などスポーツ振興において活躍した人物であり、登山や写真を趣味としていた。その性格は剛健実直、健啖、親分肌で

あり自宅に来客が多く、酒肴を供していたという（大食漢・甘党であり、鮨・すき焼き・餅が好物であった)。また、昭和初期の自宅の部屋はすべて和式の畳敷きであり、西洋趣味ではないにもかかわらず電気冷蔵庫や映写機、電話、扇風機、天体望遠鏡、ピアノ、アコーディオン、ライカ製カメラを所有していた。このような状況は、戦間期の社会的な地位が高く経済的にも余裕のある新中間層に属する家庭の生活の一端を示している。なお、伝統的な和風の暮らしと洋風の文物や生活様式の混在状況は「和洋二重生活」（和歌森 1980）と呼ばれている。

次に、出土した遺物群の中で当主の趣味との関係が指摘できる遺物として、253 号遺構から出土したガラス製のコダック社の現像液瓶があり、当主は写真が趣味で現像・焼き付けも行っていたという情報と一致する。また、家族との関係が指摘できる遺物として、284 号遺構から次男の名が手描きされた灰皿が出土しており、253 号遺構から多量に出土した磁器人形（ビスクドール）は３人姉妹の存在やアメリカやヨーロッパへの海外出張との関連を想像させる。これに対し、居住者情報と一致しない点として、和風の住宅に住み、特に西洋趣味ではなかったＡ家が所有していた多量の洋食器が出土している点であり、特に 253 号遺構からは和食器を凌ぐ量の洋食器が出土している。これについては「海外出張の多さ」や「夫人の趣味」といった解釈も可能であるが、洋食器の種類別では皿類の割合が低く、カップ＆ソーサー類の割合が高いことから、来客が多かったＡ家でカップ＆ソーサー類が頻繁に用いられたことが想定できる（山田 2006)。このように、発掘調査によって明らかになったＡ家の「和洋二重生活」は、当時の都市部に居住していた新中間層の実態を知るうえで非常に興味ある事例である（櫻井 2023)。

（3）高度経済成長期の消費生活

通常は発掘調査の対象となりにくい、戦後の高度経済成長期の消費生活を語る遺跡の発掘調査が実施されている事例がいくつか存在する。その一つが高度経済成長期の廃棄土坑（ゴミ穴）が検出された横須賀市長岡南遺跡であり（図２）（吾妻考古学研究所 2012、櫻井 2018)、遺物（不燃物）が廃棄された時期は､ガラス瓶に陽刻されている瓶の製造年代などから 1960 年代前半と推定された（横須賀市で資源ごみが回収されたのは 1970 年代以降である)。また、本廃棄土坑が掘られた時期にはこの地に大手都市銀行の行員寮が存在しており、本廃棄土坑はこの寮から出た不燃ゴミを廃棄する目的で掘られたものであると推測された。

本廃棄土坑からは合計 323 点の遺物（生活財）が出土している。出土した遺物（生活財）に使用されている素材としては陶磁器、ガラス、木材、金属（鉄製・琺瑯製・アルミ製)、プラスチック、ビニール、そして複数素材の使用があるが、全体に占める割合が高い順ではガラスが 64.4％と過半数を占め、次いでプラスチックが 11.8％、鉄が 11.5％、陶磁器が 9.0％と比較的高い割合を占めている。種類別では、全体に占める割合の高い順に薬品が 21.4%、日用品が 15.5％、調味料が 14.9%、化粧品が 10.2％、電気器具が 7.4%、食品が 7.1%、食器・食品容器が 7.1%、清涼飲料が 5.0%、アルコール飲料が 3.7% などとなっている。さらにアルコール飲料としてビール・ワイン・日本酒・焼酎・







図2　横須賀市長岡南遺跡の廃棄土坑と出土遺物（吾妻考古学研究所2012、櫻井2018）

ウイスキー、清涼飲料としてジュース・炭酸飲料・濃縮乳性飲料・薬用清涼飲料、乳飲料として牛乳、嗜好飲料としてインスタントコーヒー、食品として食用油脂・漬物や佃煮・ヨーグルト・ドロップ・カップアイス・ベビーフード、調味料として食塩・コショウ・醤油・ソース・ケチャップ・マヨネーズ・味の素・酢・味醂、薬品として医療用薬品・一般用薬品・軟膏・目薬・湿布剤・アンプル、化粧品として整髪料・化粧水・化粧クリーム・ヘアトニック・香水・香油・口紅・マニキュア・除光液、食器・食品容器として湯飲み・コップ・碗・鉢・小鉢・なます皿・小皿・洋皿・コーヒーカップ・ソーサー、日用品として建水・茶漉し・石鹸箱・歯ブラシ・シャンプー・リンス・ヘアブラシ・ヘアカーラー・洗剤・染み抜き剤・ベンジン・染料・蛍光塗料・殺虫剤・機械油・自動車洗剤・花瓶・置き時計・温度計・シガレットケース・ビニール傘・草履・スリッパ・ビーチサンダル・靴墨、文具としてインク・墨汁、電気器具として電気行火・電球・真空管・乾電池、電気用品としてスイッチ・コンセント・ソケット・碍子、建築材としてタイルなどがある。

これらの出土遺物は、銀行の行員が集団で暮らしていた寮において日常的に使用され・廃棄された生活財ということになる。その特徴をあげると、出土した生活財の素材としてガラスの割合が64.4％と過半数であるのに対してプラスチックは11.8％であり、現在の状況と比較するとこの時期

のプラスチック製品の割合はそれほど高くないことがわかる。次に、種類別では、全体に占める割合が最も高いものが 21.4% を占める薬品であるが、医療用薬瓶は少なく売薬である鎮痛剤（ピリン系)・胃腸薬・整腸剤・ビタミン剤、軟膏、目薬、湿布剤などの薬品類、ビタミンＢ補給剤である「アリナミン」（糖衣錠）が出土している。また、調味料が 14.9% と割合が高いことや嗜好品としてワイン・ウイスキー・焼酎などのアルコール飲料やジュース・「ファンタ」・「カルピス」・インスタントコーヒーなどの清涼飲料が多いことは、若者が中心の当時の寮生活を想像させるものである。同様に寮における日常生活に関わる遺物として、石鹸箱、歯ブラシ、シャンプー、リンス、台所用洗剤など多様な生活財が出土しているが、なかでも殺虫剤が多く出土している点は、当時の住環境や生活環境を反映していると思われる。また、化粧品も 10.2%を占めているが、ここでは様々な化粧品メーカーの化粧水や化粧クリーム、さらにはコールドクリーム・香水・口紅・マニキュア・除光液・ヘアカーラーなどの化粧道具が出土しており、女性の行員が多かったことが窺われる。

本発掘資料は大量生産・大量消費の時代であるわが国の高度経済成長期を象徴する遺物群であるが、この時期は多くの地域で行政による資源ごみの回収が実施される前のことであり、大量の不燃物がゴミ穴に廃棄されていた様子が窺える。また、出土資料を詳細に検討すると、当時の社会状況や生活環境が読み取れる資料が存在する。例えば、当時の衛生状況を知ることができる資料として、昭和 36（1961）年に発売開始された第一製薬の台所用洗剤「レスポン」のプラスチック容器があるが、その容器の胴部には以下のような説明書きが印刷されている。

食器・野菜・果物・洗浄用 レスポン 液体中性洗剤
●水２リットル（約一升）に、レスポン約５cc を溶かし、標準液としてお使いください。（この容器のキャップ一杯は約 10cc）
●野菜や果物は、この標準液の中によくひたしてから振り洗いし、そのあと水でよくすすいでください。
●油で汚れた食器類は、標準液の中に入れ、スポンジやヘチマなどで軽くこすって洗いおとし、清水をそそいで仕上げてください
●野菜や果物洗いに…風味をそこなわず、ビタミンなどの栄養素をこわさず、蛔虫卵・大腸菌・農薬などを完全に洗いおとして、清浄な野菜・果物にします。

この説明によって当時の洗剤は水に溶かして、食器類だけでなく野菜や果物も洗っていたことがわかるが、その目的は野菜や果物についた蛔虫卵・大腸菌・農薬を落とすことであった。すなわち、1960 年代前半のわが国では人糞が野菜などの肥料として普通に使用されており、大腸菌も当時は身近な存在であったことがわかる。

３．近代の終焉と次の時代

(1) 遺跡の消滅

日本考古学では、戦後になって中世考古学や近世考古学が新たな研究分野として定着したが、1990 年代中頃になると、さらに「新しい時代の考古学」である近現代考古学が加わった（五十嵐・阪本 1996)。その一方で、考古学が研究対象とする時代が徐々に現在に近づくという状況が続くことによって、「限りなく現在に近い時代（あるいは未来）にも遺跡は存在し、遺物が発掘され続ける」という誤解が生じているのではないか危惧している。それが幻想であることについては、以前に近現代のガラス瓶についてまとめた書籍の中で以下のように述べた。

> わが国ではガラス瓶に限らずアルミ缶、紙パック、ペットボトルなどの容器に関しても考古資料として扱うことは既に難しくなっている。それは、ガラス瓶など様々な容器のリサイクルが進んだ結果であり、それ自体は喜ばしいことであるが、将来のリサイクル社会で人類は発掘されるべき遺物を何も残さなくなることになる。そうなると生活財の消費に関する研究は、モノ自体を扱うのではなく、製造メーカーが保管している商品カタログや通信販売の商品カタログの研究（Schlereth1980)、さらに雑誌やテレビコマーシャルにおける広告の研究が主になってくる（桜井 2006：142 頁）

この文章で述べたように、わが国の多くの地域では高度経済成長期以降にゴミの分別収集が始まり、資源ごみのリサイクルが進んだが、その後わが国では家庭から出る生活ゴミは行政によって収集されるようになった。その結果、昔のように家の周囲に穴を掘って不燃ゴミを捨てる（埋める）必要がなくなり、新たな遺跡が形成されることはなくなったのである。しかし、高度経済成長期以降の遺跡の発掘調査は不可能ではない。家庭から収集されたゴミで埋め立てられた場所を発掘することは可能である。その典型的な事例が、かつてニューヨークで実施されたゴミプロジェクト（garbage project）による発掘調査であるが（Rathje1979)、わが国でも東京都江東区の「夢の島」などのゴミの埋め立て処分場を発掘調査の対象とすることができる。ただし、これらのゴミは、廃棄された時期はある程度特定できるものの、一定の地域からまとめて収集されたものであり、消費者である特定の家族や集団、あるいは個人を識別できるような廃棄物ではない。そのため、従来のように発掘資料によって家族や個人の消費生活について語ることができる遺跡は、高度経済成長期が最後ということになる。

しかしながら、高度経済成長期の発掘資料は埋蔵文化財として認定されないため、この時期の遺跡や遺物を埋蔵文化財として発掘調査を実施することは難しい。学術調査として高度経済成長期の遺跡の発掘調査を実施することが残された方法であるが、そのためには高度経済成長期の発掘資料が、近代という時代を語る資料として重要な存在であることを訴えていく必要がある。

（2）近代の終焉と次の時代の始まり

「近代」という時代区分は通常、19 世紀半ばの開国あるいは明治維新からアジア太平洋戦争終結の時期までであり（櫻井 2019)、それ以降（戦後）が「現代」という時代であるというイメージが強い。しかし、「現代」が時代名称であるならば、いつまでが「現代」なのであろうか。「現代」には「今の世」や「当世」という意味があり、そもそも時代名称として使用するには問題がある。その意味で、現在はいまだ「近代」という時代に属しており、我々はいまだ「近代人」であるということになる。

これに対し、近代の次の時代（ここでは仮に「ポストモダン」と呼称しておく）が既に到来していると考えることもできる（東 2001)。この点については、以前に空間認識という観点から前近代と近代の違いについて述べたことがあり（櫻井 2024a)、前近代は自己を「自己中心的空間」へ位置づける時代、近代が自己や他者を「ユークリッド空間（あるいは座標空間)」へ位置づける時代と考えたが、「ポストモダン」は自己や他者を「サイバー空間」に位置づける時代ということになる。なお、「サイバー空間」については 2000 年代前半のブログやＳＮＳの拡散に始まり、2016 年がＶＲ（Virtual Reality：仮想現実）元年とされ、同年に現実空間にキャラクターを出現させる『ポケモン GO』（GPS 位置情報ゲーム）が流行したことが思い出される。さらに、AI 技術も 2010 年代になって注目されるようになり、現在急激な進化を遂げている。このように 2010 年代後半には近代を超越した「ポストモダン」の時代が既に始まっていると個人的には感じている。

考古学を現在や未来とは関係ない遠い過去について研究する学問分野であるとするならば、これらは無用な議論であるが、今回のように近現代考古学の立場から近代の画期について考える際には、こうした議論は避けて通れないものである。

参考文献

東 浩紀 2001『動物化するポストモダン』講談社
吾妻考古学研究所 2012『神奈川県横須賀市　長岡南遺跡―発掘調査報告書―』
五十嵐彰・阪本宏児 1996「近現代考古学の現状と課題－「新しい時代」の考古学をめぐって－」『考古学研究』43 巻２号
ヴェブレン．T．（小原訳）1961『有閑階級の理論』岩波書店
桜井準也 1997「高度経済成長期の考古学－都市近郊農村の事例から－」『民族考古』第４号
桜井準也 2004『モノが語る日本の近現代生活－近現代考古学のすすめ－』慶應義塾大学出版会
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房（増補版 2019）
桜井準也 2007「近現代遺物研究と消費理論」鈴木公雄ゼミナール（編）『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会
櫻井準也 2018「発掘された高度経済成長期の消費生活」『尚美学園大学総合政策論集』第 26 号（『遺跡と現代社会』六一書房 2023 に転載）
櫻井準也 2019「近代社会の始まり」神奈川県埋蔵文化財センター『令和元年度考古学ゼミナール　時代の移行期を探る』
櫻井準也 2023「近代消費生活における個人・ライフスタイル―近現代遺跡の事例から―」『尚美学園大学総合政策論集』第 33 号（『遺跡と現代社会』六一書房 2023 に転載）
櫻井準也 2024a「考古資料からみた日本人の空間認知構造」小林謙一（編）『考古資料と歴史史料』中央大学出版部
櫻井準也 2024b「近現代遺物からみた近現代の消費生活―研究成果と問題点―」『江戸遺跡研究』第 11 号
新宿区立新宿歴史博物館 2021『四谷塩町からみる江戸のまち―近世考古学の世界―』

ダグラス．M．＆イシャーウッド．B．（浅田・佐和訳）1984『儀礼としての消費』新曜社
富永健一 1990『日本の近代化と社会変動』講談社
長佐古真也 2001「階層による陶磁器組成の変化」江戸遺跡研究会（編）『図説江戸考古学研究事典』柏書房
日本大辞典刊行会 1974『日本国語大辞典』小学館
ブルデュー．P．（石井訳）1990『ディスタンクシオン』藤原書店
ボードリヤール．J．（今村・塚原訳）1979『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店
ボードリヤール．J．（宇波訳）1980『物の体系』法政大学出版局
ボードリヤール．J．（竹原訳）1984『シミューラークルとシミュレーション』法政大学出版局
マクラッケン．G．（小池訳）1990『文化と消費とシンボルと』勁草書房
三浦の塚研究会 2003『漁村の考古学 三浦半島における近現代貝塚調査の概要』
港区教育委員会・盤古堂 2006『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』
山田仁和 2005「戦間期の新中間層家庭における洋食器の保有状況」『歴史智の構想―歴史哲学者 鯨岡勝成先生追悼論文集―』鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会
山田仁和 2006「第 253 号遺構及び周辺の近代遺物出土遺構について」港区教育委員会・盤古堂『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』
和歌森太郎 1980「洋風生活の普及」『日本生活文化史 第９巻』河出書房新社
Rathje,W.R.1979 Modern Material Culture Studies. In M.Shiffer(ed.) Advances in Archaeological Method and Theory,vol.2,Academic Press
Schlereth,T.J.1980 Mail-order Catalogs as Resources in Material Culture Studies. An Annual of American Cultural Studies7.Reprint Schlereth,T.J. Cultural History & Material Culture.University Press of Virginia,1992

令和８年度考古学ゼミナール

考古学でひも解く 文化の画期　要旨集

発　行　日　　2026（令和8）年10 月17 日

編集・発行　神奈川県教育委員会生涯学習部文化遺産課中村町駐在事務所

（神奈川県埋蔵文化財センター）

〒232-0033　横浜市南区中村町３－191 －1

電話 :045 －252 －8661